京都産業大学 コーオプ教育研究開発センター F工房

平成 27 年度 活動報告書

F工房

Facilitation

むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

巻頭言

これで7回目の、そしてコーオプ教育研究開発センターの元では最後のF工房報告書をお届けします。全国的にも珍しい大学内ファシリテーション・センターとして産声をあげた2009年当時のことが懐かしく思い出されます。NPO業界では空気のように「あるのが当たり前」といえる存在のファシリテーションも、大学という環境の中では一部のキリスト教系の私立大学を除けばまだまだ認知されておらず、「ファシリテーションって、いったい何？」という問いにしどろもどろになりながら答えていた日々……。そんな状況にあったにもかかわらず本学に曲がりなりにもファシリテーションに特化した部署が立ち上がったのは、本学がキャリア教育に特段の情熱を注ぎ、キャリア教育をめぐる新しい試みが次々と生まれる環境があったからにほかなりません。

あれから7年。ファシリテーションは本学キャリア教育にしっかりと根を下ろし、次の展開をねらう位置にたどり着いたと思います。そのことはこの報告書のあちらこちらから感じ取っていただけると思います。この4月からF工房はコーオプ教育研究開発センターを離れ教育支援研究開発センターに移管されることが決まっています。移管にあたり、前者がキャリア教育研究開発センターと呼ばれていた頃からF工房の立ち上げにかかわり、その後の事業展開に直接、間接に貢献していただいたすべての方々に「よくぞここまで育てていただいた」と篤くお礼を申し上げます。今後は教育支援研究開発センターの下で、我が国のすべての大学の課題となりつつある能動的学習（アクティブラーニング）の定着、そしてその先にある学習パラダイムへの転換に向けて、ファシリテータ・マインドを忘れることなく尽力していきたいと考えています。

F工房事業統括/文化学部教授　鬼塚哲郎

CONTENTS

巻頭言…… 1

第1部　平成27年度活動報告

1. 年間活動実績概要と利用人数（月別）…… 4
2. 事業報告 …… 9

1）F工房主催事業

・アクティブラーニング・パッケージの作成と配布 …… 9
・ファシリテーション Labo.（2015）……10
・2015年度 ファシリテーション研究会……17
・F工房主催フォーラム「ファシリテーションをふまえた能動的学習の展開に向けて」……20

2）学内他部門との協働

■各学部

・理学部　入学前教育……21
・文化学部　スターティング・セミナー2015 ……23
・コンピュータ理工学部　新入生オリエンテーション……24

■その他

・フレッシャーズ・コミュニケーション2015……26
・私立大学図書館協会第1回研究会 ……28
・ティーチング・アシスタント（TA）研修会 ……30
・学長室（教育支援研究開発担当）職員へのファシリテーション研修……31
・私立大学キャンパスシステム研究会……32
・第7回、第8回学部FD/SD推進ワーキンググループ ……33
・体育会支援セミナー　OB勉強会 ……35

3）授業の支援

■キャリア形成支援教育科目

・「キャリア・Re-デザイン」……36
・「自己発見と大学生活」……38

■学部専門科目

・「法学部演習」（久保先生、岩永先生）……41
・「法教育演習Ⅰ」……43

■学部初年次科目

・「入門セミナーA（文化学部）」……47
・「プレップセミナー（法学部）」……51
・「ファンダメンタル・セミナー（法学部/耳野先生）」 ……53

■その他

・アイスブレイクの実施（初回授業等）……60

4）課外活動の支援

・第37回クラブリーダー研修会 ……61

5）学外での発表・講演

■学会 ……62
■他大学……64
■その他 ……65

・大学コンソーシアム京都　2015年度　第13回SDフォーラム　分科会……65
・大学コンソーシアム京都　SDワークショップ2015……66
・京滋地区私立大学教職員組合連合　第3回「学生と社会を変える大学教育フォーラム」……67

6）学外への協力……68
7）学外への調査……70
8）コンサルティング ……72

第2部　活動から得られた知見

1. ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージについて……78
2. F 工房主催フォーラム「ファシリテーションをふまえた能動的学習の展開に向けて」…82

活動を振り返って……86

参考資料

1. ファシリテーションの実践事例……89
2. 発表資料 ……90
3. 広報物作成 ……92

第１部　平成２７年度活動報告

1. 年間活動実績概要と利用人数（月別）

4月　　来室者数　３９６名（学生３３５名、教員４４名、職員１２名、学外５名）

4 日（土）	学内他部門との協働	文化学部 スターティング・セミナー2015
	学内他部門との協働	コンピュータ理工学部 新入生オリエンテーション
6 日（月）	学内他部門との協働	ティーチング・アシスタント（TA）研修会
7 日（火）	授業の支援	イタリア語エキスパートⅠ
8 日（水）	授業の支援	入門セミナーA（文化学部/竹内先生）
15 日（水）	授業の支援	プレップセミナー（法学部/新先生）
16 日（木）	学内他部門との協働	ティーチング・アシスタント（TA）研修会　ふりかえり会
17 日（金）	授業の支援	法学部演習（久保先生）
21 日（火）	授業の支援	プレップセミナー（法学部/久保先生）
24 日（金）	学内他部門との協働	文化学部 スターティング・セミナー2015 ふりかえり会
27 日（月）	授業の支援	入門セミナーA（文化学部/宮川先生）
29 日（水）	学内他部門との協働	理学部 入学前教育 ふりかえり会
《複数日にわたり実施》		
毎週（月）、（火）、（水）、（木）、（金）		
	授業の支援	自己発見と大学生活
8 日（水）、15 日（水）、22 日（水）、29 日（水）		
	授業の支援	入門セミナーA（文化学部/草野先生）
10 日（金）、17 日（金）		
	授業の支援	入門セミナーA（文化学部/池田先生）
22 日（水）、29 日（水）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザイン

5月　　来室者数　３３２名（学生２７３名、教員３２名、職員１７名、学外１０名）

1 日（金）	授業の支援	入門セミナーA（文化学部/池田先生）
13 日（水）	授業の支援	「自己発見と大学生活」第 1 回学ファシの集い～2、3年生対象～
	相談業務	高大接続授業（3年生向け） 運営相談（職員）
18 日（月）	授業の支援	「自己発見と大学生活」第1回学ファシの集い～4年生対象～
21 日（木）	相談業務	「大学の歴史と京都産業大学」授業　運営相談（職員/計2回）
《複数日にわたり実施》		
毎週（月）、（火）、（水）、（木）、（金）		
	授業の支援	自己発見と大学生活
16（土）～17（日）、27 日（水）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザイン

6月　　来室者数　３０９名（学生２４６名、教員２９名、職員２２名、学外１２名）

1 日(月)	授業の支援	「自己発見と大学生活」第2回学ファシの集い
9 日(火)	授業の支援	プレップセミナー(法学部/久保先生)
11 日(木)	課外活動の支援	学ファシ自主企画に関する相談(学生/計3回)
13 日(土)	学外への協力	NHK「学校再発見バラエティーあほやねんすきやねん」番組出演
19 日(金)	学内他部門との協働	2015年度私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会第1回研究会　運営側むけ事前研修会
20 日(土)	学外への協力	京都市未来まちづくり100委員会
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(水)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
10 日(水)、24 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザイン

7月　　来室者数　２６２名（学生１８９名、教員３５名、職員２２名、学外１２名）

3 日(金)	学内他部門との協働	2015年度私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会第1回研究会
7 日(火)	相談業務	情報センター学生サポートスタッフ「計算機運用補助員(MiCS)」向け研修　運営相談(職員/計3回)
10 日(金)	相談業務	グローバル・サイエンス・コース Monthly GSC　運営相談(職員/計2回)
14 日(火)	相談業務	進路ミニガイダンス　運営相談(職員)
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(水)、(木)、(金)　※7 月 23 日(木)まで		
	授業の支援	自己発見と大学生活
24 日(金)～31 日(金)		
	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング(計8名)

8月　　来室者数　２８名（学生１５名、教員２名、職員８名、学外３名）

5 日(水)	授業の支援	「キャリア・Re-デザイン」全体ふりかえり会

9月　　来室者数　７６名（学生３７名、教員８名、職員２３名、学外８名）

9 日(水)	学外への調査	大阪大学　教育学習支援センター主催FDセミナー参加
10 日(木)	学内他部門との協働	学長室(教育支援研究開発担当)職員へのファシリテーション研修
17 日(木)		「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」冊子配付(対象：専任教員)
17 日(木)	授業の支援	「自己発見と大学生活」学ファシ　ふりかえりの集い
21 日(月)～23 日(水)	学外での発表・講演	日本教育工学会　第31回全国大会への参加および一般研究発表(発表は22日)

29 日（火）	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング（1名）

１０月　　来室者数　７６名（学生４０名、教員１７名、職員９名、学外１０名）

16 日（金）	相談業務	グローバル・サイエンス・コース Monthly GSC 運営相談（職員）
18 日（日）	学外での発表・講演	大学コンソーシアム京都 第13回SDフォーラム 分科会での講演
22 日（木）	学内他部門との協働	私立大学キャンパスシステム研究会 第1分科会での講演および ワークショップ運営
《複数日にわたり実施》		
5 日（月）、9 日（金）、19 日（月）、27 日（火）		
	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング（計4名）
7 日（水）、21 日（水）		
	主催事業	「ファシリテーション Labo.（2015）」第1回、第2回
16 日（金）、23 日（金）		
	授業の支援	法学部演習（岩永先生）
14 日（水）、28 日（水）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザイン

１１月　　来室者数　７７名（学生４１名、教員１４名、職員１１名、学外１１名）

9 日（金）	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング（計2名）
19 日（木）	相談業務	「LCSのグループワーク道場！」企画相談（学生）
《複数日にわたり実施》		
6 日（金）、13 日（金）、20 日（金）		
	授業の支援	ファンダメンタル・セミナー（法学部/耳野先生）
7 日（土）～8 日（日）、11 日（水）、25 日（水）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザイン
4 日（水）、18 日（水）		
	主催事業	「ファシリテーション Labo.（2015）」第3回、第4回

１２月　　来室者数　１４５名（学生１２０名、教員１７名、職員５名、学外３名）

5 日（土）	学外での発表・講演	大学コンソーシアム京都 SDワークショップ2015 での講演
9 日（水）	授業の支援	キャリア・Re-デザイン
10 日（木）	主催事業	ファシリテーション研究会
11 日（金）	相談業務	学生FDスタッフAC燦主催 京産共創プロジェクトⅣにむけた燦メンバーへのファシリテーション研修内容に関する相談（学生）
	相談業務	第37回クラブリーダー研修会 運営相談（学生/計5回）
18 日（金）	相談業務	ゼミ（経営学部）でのふりかえりプログラム 企画・運営相談 （学生/計2回）
	相談業務	2016年度コンピュータ理工学部 新入生オリエンテーション 運営相談（職員、教員/計2回）

19 日（土）	学外での発表・講演	京滋地区私立大学教職員組合連合 第3回大学教育フォーラムでの講演
24 日（木）	相談業務	世界問題研究所主催 学生ワークショップ 企画・運営相談（学生/計6回）
《複数日にわたり実施》		
2 日（水）、12 日（土）～13日（日）		
	主催事業	「ファシリテーション Labo.（2015）」第5回、実践編（合宿）

1月　来室者数　116名（学生105名、教員6名、職員4名、学外1名）

6 日（水）	学内他部門との協働	第7回学部FD/SD推進ワーキンググループでの話題提供およびファシリテーション研修
15 日（金）	相談業務	グローバル・サイエンス・コース Monthly GSC（次年度分）運営相談（職員/計2回）
18 日（月）	相談業務	2016年度理学部 入学前教育 運営相談（教員、職員/計3回）
20 日（水）	相談業務	2016年度フレッシャーズ・コミュニケーション 運営相談（職員/計3回）
21 日（木）	相談業務	文化学部スターティング・セミナー2016 運営相談（教員）
《複数日にわたり実施》		
8 日（金）、15 日（金）、22 日（金）		
	授業の支援	法教育演習Ⅰ

2月　来室者数　60名（学生33名、教員13名、職員11名、学外3名）

3 日（水）	学内他部門との協働	第8回学部FD/SD推進ワーキンググループでの話題提供およびファシリテーション研修
12 日（金）	課外活動の支援	第37回クラブリーダー研修会の運営に向けた志学会執行委員会メンバーへのファシリテーション研修会
18 日（木）	授業の支援	「キャリア・Re-デザイン」全体ふりかえり会
	相談業務	アイデアソン体験＆勉強会 運営相談（教員）
《複数日にわたり実施》		
24 日（水）～25 日（木）		
	学生ファシリテータの育成	2016年度 学生ファシリテータ キックオフ合宿

3月　来室者数　70名（学生35名、教員20名、職員13名、学外2名）※3月24日現在

1 日（火）	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング（1名）
3 日（木）	相談業務	第21回FDフォーラム第3分科会 企画サポートに関する相談（学生）
4 日（金）	学内他部門との協働	体育会支援セミナー OBによる勉強会
7 日（月）	主催事業	F 工房主催フォーラム
10 日（木）	学外での発表・講演	中部大学 2015年度キャリア教育ファシリテーション研修
11 日（金）	ヒアリング	アクティブラーニングに関する教員へのヒアリング（1名）

25 日（金）	学内他部門との協働	2016年度フレッシャーズ・コミュニケーション 先輩学生への事前研修
28 日（月）	学内他部門との協働	2016年度コンピュータ理工学部 新入生オリエンテーション 先輩学生への事前研修
29 日（火）	学内他部門との協働	2016年度理学部 入学前教育 先輩学生への事前研修
30 日（水）	授業の支援	2016年度「自己発見と大学生活」担当者会議（研修）①
31 日（木）	学内他部門との協働	2016年度理学部 入学前教育
《複数日にわたり実施》		
8 日（火）、15 日（火）		
	学生ファシリテータの育成	2016年度 学生ファシリテータ研修（第2回、第3回）
24 日（木）、25 日（金）		
	学内他部門との協働	文化学部スターティング・セミナー2016 先輩学生への事前研修

年間来室者のべ総数

1，947名

学外からの来訪および問合せ件数

他大学からの来訪 …1 件
Web ページ掲載情報に関する問合せ …1 件
［問合せ詳細］
他大学 共通学群 体育・健康科目担当教員
テキストへのアイスブレイク掲載

提供したプログラムへの参加者数

プログラムへの参加者のべ総数 …4,200名
学生ファシリテータとしての参加者数… 194名

※3月24日現在

2. 事業報告

1）F工房主催事業
アクティブラーニング・パッケージの作成と配布

□趣旨

近年、従来の「教員が何をどう教えるか」に主眼をおいた「教育」から、学生が何をどう学ぶかに主眼をおいた「学習」へのパラダイム転換が活発に議論されるようになった。そうした流れの中、学習者による能動的な学習活動を授業に組み込んだ「アクティブラーニング型授業」への関心が高まり、その具体的ノウハウに関する情報交換が活発に行われるようになった。一方、正課・正課外の学習の場においてF工房はこれまでメンバー間の対話を促進することで学習支援の役割を果たして来たし、6 年間に及ぶ支援活動の中で、どのようにして場に参集するメンバーが自らの考えを発するような場づくりができるかについてのノウハウを蓄積してきた。蓄積されたファシリテーションのノウハウをまとめ、アクティブラーニングを推進する教育支援ツールとして「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」を作成し、全専任教員に配布した。

□概要

作成時期　4 月～8 月
冊　　子　発行：8 月末日、作成部数：400 部
　　データ掲載先：http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/f/action/alp.html
配布部数　教員 350 部、各学部事務室 8 部、その他学内の協働先等 30 部

□内容

パッケージは、これまでF工房が蓄積して来たファシリテーションによる授業支援のノウハウを整理し、アクティブラーニング型授業に簡便に取り入れることができるよう可能な限り形式知化して作成した。パッケージは以下の要素から構成される。

1）アクティブラーニング実践におけるファシリテーションの有効性について
2）ファシリテーションのノウハウをアクティブラーニング型授業へ組み込んだ領域別事例
3）プログラム進行に有効なファシリテーション・ツール

なお、パッケージの作成、発行と相前後して、教育支援ツールの浸透を推進し、またその成果を検証するため調査研究を行った。

□成果・課題

1）ヒアリングを行った教員全員が、若干の留保をつけながらもアクティブラーニングを肯定的に捉えていることが分かった。

2）パッケージについては、質問紙調査の結果、8 名の教員全員から、パッケージを参考にしつつファシリテーションの導入を検討したいと、その有用性を認められた。

3）予備調査を通じて、F 工房がファシリテーションのツールとして実践し蓄積してきたものはアクティブラーニングのツールとしても有用であることが明らかになった。

※詳細は第 2 部（p. 78～81）を参照。

ファシリテータ・トレーニング連続講座「ファシリテーション Labo.（2015）」

□テーマ・趣旨

F 工房主催イベント「ファシリテーション Labo.（ラボ）」は、（1）ファシリテータとして主体的に活動できるようになること（2）ファシリテータに必要な心構えや考え方を学ぶことを目的に開催しており、今年度で 3 回目の開催となる。今年度は、対象を「学生ファシリテータ未経験者」とし、合宿講座のみ学生ファシリテータの参加も受け付けた。この対象層の変更に伴い、全 5 回（計 15 時間）の連続講座を「基礎編」と位置づけ、昨年度までは連続講座に組み入れられていた 2 日間（計 13 時間）の合宿講座を「実践編」と位置づけて開催した。

□概要

日　時　　下表のとおり　※時間はいずれも 13:30〜16:30（合宿講座は除く）
場　所　　（第 1 回）4 号館 4F 演習室、（第 2〜5 回）4 号館 4H 演習室、
　　（合宿講座）松の浦セミナーハウス
参加者　　（第 1〜5 回）18 名（各回の参加者は下表のとおり）、（合宿講座）13 名

日程		テーマ	参加者
基礎編			
10 月	7 日	アイスブレイクの意義を体感する	15
	21 日	ファシリテーションの機能とミッションを理解する	12
11 月	4 日	ファシリテータマインドの根っこに触れる	9
	18 日	ファシリテーションのスキルと手法を実地に学ぶ	6
12 月	2 日	ファシリテータを体験する	8
実践編（合宿講座）			
12 月	12 日	実際にワークショップをデザインする 対話を通して話し合いのカタチを考える	13
	13 日	ファシリテータとして活躍する これまでの学びをふりかえる	13

□内容

［第 1 回］　「アイスブレイクの意義を体感する」

オリエンテーション

「ファシリテーション Labo.」の目的とファシリテーションの簡単な定義、講座の進め方について、参加者全員と共有した。

アイスブレイク「フリップ自己紹介」

A4 用紙を四つ折りにして「今の心境」「名前・学部・学年」「ファシラボへの参加を決めた理由、期待」「自由欄（自分のことを、周りに知ってもらうための内容）」を記入したフリップを作成。参加者同士でペアになり自己紹介をおこなった。

グループワーク「ファシリテーションと聞いて、思い浮かぶのは？」

自己紹介をおこなったペアを合体し、4 人組をつくってグループワークをおこなった。参加者同士で「ファシリテーション」「ファシリテータ」という言葉を聞いて思い浮かぶことについて話し合い、その結果を会場全体で共有した。

グループワーク（2）「アイスブレイク体験をふりかえる」

A4 用紙に「ファシラボ開始前・直後の緊張度」「いまの緊張度」をパーセンテージで示し、その変化の要因を個人で書き出してグループ共有し、講座開始後のアイスブレイク体験を振り返った。グループから 1 名ずつ話し合いの内容を発表してもらい、どのような要素によって「緊張度」が変化したかを分析した。

ミニレクチャー「アイスブレイクの意義」

「アイスブレイク体験をふりかえる」で出されたコメントに触れながら、ファシリテーションの定義や K.Lewin（クルト・レヴィン）の提唱する「Unfreezing(解凍)」モデルの解説がおこなわれた。

［第 2 回］　「ファシリテーションの機能とミッションを理解する～何のために、何を～」

オリエンテーション

プログラムの冒頭において、参加者同士のペアワークで前回の内容や学びを共有したうえで、参加者が記入したふりかえりシートのコメント内容を紹介した。

ワーク（1）「お互いのニックネームをつける」

学びのコミュニティを形成することを目的に、参加者同士でニックネームを付け合うワークに取り組んだ。「自分も周囲も納得する」ことをルールとし、4 名～5 名のグループに分かれてお互いに質問し合いながらニックネームを検討。全員のニックネームが決定したところで、新しく決まったニックネームとその理由を参加者全員で共有した。

ワーク（2）「ファシリテーションの機能と役割について考える」

ファシリテーションの役割について具体的に考えるため、日常生活の中で「居心地がいい」、「居心地がよくない」、「対話が起こった」、「対話が起こらなかった」と感じた場について話し合った。該当する場について付箋紙に書き込んだうえで、模造紙に貼り付けながらグループ内で共有した。

ミニレクチャー

ファシリテーションの歴史的背景に加え、J.Gibb（ジャック・ギブ）の提唱した理論モデルを紹介し、人と人がともに何かに取り組む際に発生する「自己防衛を生み出す 4 つの懸念」の働きについて解説した。

［第 3 回］　「ファシリテータマインドの根っこに触れる～どんな心構えが必要か？～」

アイスブレイク（1）「ニックネーム覚え」

前回参加者同士で決めたニックネームを互いに覚えるために、ボールを使ったニックネーム覚えワークをおこなった。全員で円形になり、ボールを投げる相手の名前を呼びながらボールを順番にパスしていく。

アイスブレイク（2）「ネームチェーン（進化版）」

当初予定にはなかったが、この日参加していた学生ファシリテータからの発案により「ネ

ームチェーン（進化版）」を実践した。（1）全員で円になり（2）自分の名前・右隣の人の名前・左隣の人の名前を言い（3）時計回りの順で名前を言う人をまわしていく、というもの。1回目に実践した際のタイムを計測しておき、2回目の実践にあたっては目標値と目標達成のための方策について参加者全員で考えることによって一体感が生まれた。また、これも当初の予定になかったが、このアイスブレイク自体のふりかえりについても、短時間でおこない、一体感が生まれた要因などについて参加者全員でディスカッションした。

グループワーク「ケースを分析する」

（1）ファシリテータに必要な心構えを考える（2）ファシリテーションがどんな場面で働くか？を具体的にイメージする、この2つをねらいとし、ケース分析ワークをおこなった。参加者が体験した「対話がうまくいった／いかなかった場面」についてケースを一つ決め、その場面について「何が起こったか」「周りはどう行動していたか」「自分はどう関わったか」といった切り口で分析した。参加者は「授業」「部活・サークル」「その他」など、自分が考えたいカテゴリごとにわかれ、グループの中で議論を深めたうえで話し合いの内容について全体で共有した。

ミニレクチャー

ファシリテータに必要な視点として「コンテントとプロセス」を紹介した。話し合いの内容など目に見えるものを「コンテント」、メンバー同士の影響関係などの目に見えにくいものを「プロセス」と呼び、ファシリテータは「コンテント」だけでなく「プロセス」に注目したり働きかけたりすることが求められると解説した。

［第4回］　「ファシリテーションのスキルと手法を実地に学ぶ～どんな力が必要か？～」

オリエンテーション

最初に参加者同士で近況を報告し合うことからスタートし、前回のふりかえりシートの内容の共有をおこなった。また、この日のキーワードは数あるファシリテータに求められるスキルの中でも「観察とフィードバック」を扱うことを示し、初年次対象キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」を例にしながら「観察」と「フィードバック」がどのような場面で機能しているかを紹介した。

グループワーク実践（1）「あなたの大切にしたい『キャリア・アンカー』はどれ？」

（1）グループ内で起こっているプロセスに気づく（2）観察とフィードバックが学びにつながることを実感する、の2点をねらいとし、グループワーク実践をおこなった。参加者の中から2名の観察役を募ってグループで課題に取り組んだ。課題は「あなたの大切にしたい『キャリア・アンカー』はどれ？」。E.H.シャインが提唱した「キャリア・アンカー」の中から大切にしたいものを選び、グループメンバーとの共有を経てもう一度個人で選び直すというもの。グループワーク実践の後は、観察役からのフィードバックも交えながら「印象に残っている場面」や「グループメンバーの言動について気づいたこと」の2つの切り口からふりかえりをおこなった。

グループワーク実践（2）「ぼくらのリーダー」

グループワーク実践（1）と同様の方法で、観察役と課題を変更したうえで再度実践をおこなった。2回目の課題テーマは「ぼくらのリーダー」。グループ内で「理想のリーダー像の要素」の合意形成に取り組み、1回目と同様にふりかえりをおこなった。最後に、今

回実践した「観察」と「フィードバック」がファシリテータの基本的かつ重要なスキルであることを確認し、まとめとした。

［第 5 回］　「ファシリテータを体験する」

※第 5 回は、当初「参加型の場」をつくるポイントを押さえる-どう実践したらいいか？-」をテーマに設定していたが、参加者がファシリテータをこれまでに体験した経験のないことを踏まえ、テーマを変更した。第 5 回で扱うことのできなかった「参加型の場をつくるポイント」については、合宿講座で扱うこととした。

ファシリテーション実践（1）「ファシラボに参加して学んだことは？」

参加者の中からファシリテータ役、観察役を募ってファシリテーション実践に取り組んだ。1 回目は「ファシラボに参加して学んだことは？」をテーマに、ファシラボに参加して得られた気づきや学びをグループ内で分かち合う時間を持ち、ファシリテータ役の参加者が進行役を務めた。ファシリテーション実践の終了後は、観察役からのフィードバックを交えながらその場で起こっていたプロセスに着目しながらふりかえりをおこなった。

ファシリテーション実践（2）「ファシリテータに必要な要素は？」

ファシリテーション実践（1）と同様の方法で、ファシリテータ役を変更したうえで再度実践をおこなった。2 回目は「ファシリテータに必要な要素は？」をテーマに、時間内にグループ内で 3 つの要素に絞り込むことを目標とした。実践後、（1）と同様にふりかえりをおこなった。

ミニレクチャー

「大学内でファシリテーションが活きる場面」というテーマでレクチャーをおこなった。授業やイベント等の事例を紹介したうえで、その場の目的に応じてファシリテータの役割が異なることを解説した。

［実践編（合宿）］

（1 日目午後）「実際にワークショップをデザインする」

合宿オリエンテーション、アイスブレイク

合宿の目的とスケジュールを共有した後、アイスブレイクをおこなった。今回のアイスブレイクは、第 1 回からの継続参加者が担当。事前に担当者間での打合せを重ねたうえで、当日を迎えた。担当者の進行のもと、総当たりの「フリップ自己紹介」、「ニックネーム覚え」の 2 つのワークに参加者全員で取り組んだ。当初は「共通点グランドスラム」も実施予定だったが、時間の関係上割愛した。

「アイスブレイクのプロセスをふりかえる」

当初はファシリテータの役割とワークショップの基本構造について理解を深めるためのグループワークを実践する予定であったが、これを変更。合宿開始からアイスブレイク終了までのプロセスのふりかえりをおこなった。

ミニレクチャー「ファシリテータの役割」「ワークショップの基本的な流れ」

アイスブレイクのふりかえりで出された気づきに触れながら、ファシリテータの役割と

ワークショップの基本的な流れについて解説した。「体験学習の循環過程」も紹介し、この循環過程がまわるような場をデザインすることの必要性にも触れた。

グループワーク「実際にワークショップをデザインする」

実際にF工房がこれまでに依頼を受けたことのあるワークショップデザインのケースを複数提示し、参加者の希望に応じて担当グループを決定した。参加者は「学部オリエンテーション」「語学初回授業」「必修初年次ゼミ」「その他」に分かれ、それぞれのケースの背景、目標、参加者層を踏まえつつワークショップデザインに取り組んだ。

（1日目夜）「対話を通して話し合いのカタチを考える」

グループでの作業時間を確保することの必要性を優先し、当初予定されていたプログラムを変更。「実際にワークショップをデザインする」の続きをおこなった。最後に、合宿1日目の感想や気づきなどを一言ずつ分かち合う時間を設けた。

（2日目午前）「ファシリテータとして活躍する」

2日目のプログラムは、参加者が運営するアイスブレイクからスタートした。続いてグループ内準備時間を設けた後に1グループ目「学部オリエンテーション」のプログラム実践とふりかえり、2グループ目「語学初回授業」の実践まで取り組んだ。

（2日目午前）「これまでの学びをふりかえる」

午後には2グループ目のふりかりからスタートし、「その他」を選択したグループ、続いて「必修初年次ゼミ」を選択したグループの実践とふりかえりをおこなった。最後に、この2日間を通して得られた気づきや学びを一言ずつ分かち合い、プログラムを終了した。

□成果・課題

主な成果としては、以下の点を挙げることができる。

① 学ファシ未経験者を対象としたことで、昨年度課題となっていた「参加者の身内感」が出ることがなく、今回初参加の参加者にとっても現役の学ファシにとっても新鮮な学びが得られる場となった。

② 2016年度学生ファシリテータの獲得につながった。本講座に参加した学ファシ未経験者のうち6名から応募があり、講座参加者が実際に学内でファシリテータとして活動する機会を提供することができた。

③ 合宿において「打合せ→デザイン→実施→ふりかえり」というプログラム運営の全体像を提示し、実際に参加者がその流れを体験する機会をつくることができた。

一方、連続講座の参加者のフェードアウトや欠席者の多さは昨年に引き続き課題として残った。全参加者のうち各回の平均出席人数は10名であったが、欠席回数が出席回数を上回ったのは8名、全5回に参加したのは2名であった。今回のように「学生ファシリテータ未経験者」を対象とした場合、参加者同士の「学びのコミュニティ」を一から形成する必要性が高く、できるだけ参加者全員がそろって学びを積み重ねることのできるプログラム構成が必要である。そのため、全5回ではなく全3回にするといった工夫が必要ではないかとの意見もあり、次年度においては全体の開催回数についても検討したい。

□参加者からの声（「受講者アンケート」より抜粋）

●講座全体について

【ファシリテーションについて体系的に学ぶことができたか】
・順番にゆったりと学べたので、とても分かりやすかった。
・1回しか出ていませんが、レクチャーと実践のバランスがよく、効率よく学べたと思います。
・全部受けていないので何とも言えませんが、合宿は良い学びになりました。

【ファシリテータとしてのスキルが身に付いたと思うか】
・実際にファシリテータをしている先輩等の話や行動を見て、何となくわかってきた。
・より深く、対話とディスカッションの違いについて考えるようになったためです。
・合宿2日目の実際に自分で前に立って場を動かすワークを通して、一部ではなく全体的な動きに視野を広げたり説明の順序などを工夫したりすることができた。

【ファシリテータマインドが身に付いたと思うか】
・ファシリテータの姿勢を見つめなおせたと考えている。
・ファシリテータ役になった時もすごく楽しくすることができた。
・ワークショップにて他者からの様々なコメント、新たな視点、工夫する必要を感じた。多様な人に対応したワークづくりの必要性。

【講座で学んだことを日常で活かしている or 活かそうと思っている場面はあるか】
ゼミや現在所属している組織／アルバイト（営業系）／大学の講義など／将来、教師になろうと思うので活かせると思う／初対面の人との会話や自分のやっているイベントや会社でのワークショップ

●合宿講座について

【講座に期待していたこと】
・ワークショップの実践の場がほしい。また、交流を深めたい。
・ファシリテーションの実践力。新しい人との出会い。
・新しい発見、自由な発想。

【講座を受講してみて期待通りの内容だったか】
・期待以上です。ワークショップをそもそもしたことがなかったし、フィードバックまできちんとできたことが、すごくよかったです。
・多くの人との交流を深めることができたし、ワークショップの計画、実行ができたので。
・しっかりと0（ゼロ）からワークを考え、実践できたため。また、まわりのメンバーがいたからこそ、多角的に判断、指摘され、よりよいワークになった。

【その他、ご要望について】
・各グループの持ち時間がもっとほしい。
・スムーズな講義で受講しやすかった。
・親身に相談にのってくれた。
・毎回、テーマを明確にして取組むことができていたと思います。また、ファシリテーションは割と相互理解というか、互いに受容し合うというイメージですが、フィードバックをする時はきちんと批判だったり意見が出てよりよい活動にしていこうとする姿勢を見ることができたと感じました。
・講義の第1回と、4、5回の人数の減り方が悲しかった…。
・少し時間が押してしまうこともありましたが、フリータイムもしっかり取ってくださったりワークも自由な形ですることができ、初対面のメンバーと仲良くなることもでき、とても楽しくためになる合宿でした。

【ファシリテーション Labo.の様子】

―アイスブレイク 「フリップ自己紹介」（第１回）―

―グループワーク実践・観察とふりかえり（第４回）―

―自分たちでデザインしたプログラムの実践（合宿）―

2015年度 ファシリテーション研究会

□テーマ・趣旨

F 工房開設以来、年 2 回の研究会・研修会を実施し、ファシリテーションに関する学内普及を行ってきた。このことで、教員が授業でファシリテーションを組み入れる等、一定の成果を得ていると考えられる。今年度より研修会を発展的に解消し、年 1 回の研究会を開催することで内容を充実させることとした。

また、F 工房の次のステージとして、協働してきた依頼者同士を必要に応じてつなぐ、または実践事例を一般化して情報発信する等、学内における「HUB 機能」を担うことができるよう事業を展開していく。

今回の研究会では、複数のセクターにまたがる協働を多数実践されている専門家を招聘し、2 者間以上の協働に関するノウハウを参加者と共有した。

□概要

日　時　　12 月 10 日（木）17:00-19:00
場　所　　雄飛館 ラーニングコモンズ（パフォーミングスペース）
参加者　　51 名（本学学生：16 名、教員：5 名、職員：19 名、学外：11 名）
講　師　　井口　奈保 氏（コミュニケーション・プロセス・デザイナー）
テーマ　　「セクター・立場を越えて人が集う場におけるファシリテーションの活用」

□内容

アイスブレイク

近くの人とペアになり、名前や所属、研究会の参加動機について簡単に紹介し合う。5 分の中でどんどんペアを組み替え、なるべく多くの人と自己紹介を行った。

講演　「コミュニティ・ファシリテーションとは何か？」

組織心理学を専門とする井口氏は、コミュニケーション・プロセス・デザイナーとして、様々なセクターとの協働を展開してこられ、2013 年よりベルリンを拠点に活動されている。

講演では、これまでの様々な協働を展開するなかで大切にしている考え方や行動について紹介いただいた。以下は、講演での井口氏からのメッセージを箇条書きにしたものである。

- コミュニティ・ファシリテーションは、その地域に溶け込み、前に物事を進める力。管理することではない。
- コミュニティの意義は、人生に深くかかわる人との絆。
- カンファレンスを実施し、アーティストや市民としての生きる場所を確保する。
- 生きるための信頼と愛情。何かに触れようとする心を持つ。
- 「好き」、この人となら仕事ができる、の感覚が重要。
- 人からどのようなイメージで見られたいか「自分のブランディング」が重要である。
- 時間と足を使う。食事を共にすること。様々な会に顔を出す。
- 狙いを定める。（誰といつ話すか、どこから話すか、どのように物事を決めているか等）
- パワーのある人を巻き込む。（会に招く、人と繋ぐ）
- 面白いと思ったものを繋ぐ。

・境界線を越えたかかわり。街や地域同士が直接つながる。
・友達的つながりの関係づくり。
・コミュニティ・ファシリテーションは料理である。何を入れる？コース料理にするのか？

フォーラム　「京都でコミュニティ・ファシリテーションを考えてみると」

フォーラムでは、井口氏に加え、実際にコミュニティ活動を展開している本学教員2名より話題提供をいただいた。

〈パネリスト〉
中谷真憲氏（法学部教授/NPO法人グローカル人材開発センター）
宮川康子氏（文化学部教授/仁斎塾主宰）
井口奈保氏

〈モデレータ〉
鬼塚哲郎（F工房事業統括/文化学部教授）

〈話題提供〉

中谷氏
・取組み：地域の経済界（企業等）・学生・大学・行政等を結び、産学連携教育プログラムの導入、地域事業の展開をミッションとしたセンターを設立。センターがコミュニティとして機能するよう様々な連携プロジェクトに取り組んでいる。コミュニティ・ファシリテーション的な側面がある。
・課題意識：「就職活動の在り方」について、若者が自分で考え、自分で動く、自由に人生を考える社会を理想と考えるが、実際の就職活動は、多くの学生が同時期に開始し、同じように活動するマス的な動きが目立つ。様々なコミュニティに顔を出し多様なジャンルの方との交流をきっかけに視野を広げ、自分のペースで就職活動をする等、やり方はもっとあっていいはずである。

宮川氏
・取組み：自らの意志で、常に上を目指し、貪欲に学ぶ江戸時代の町人思想、「古義堂」（町人学問所）を開いた伊藤仁斎の思想について研究している。仁斎の思想について学ぶ「仁斎塾」を市民講座として開催している。
・課題意識：現在、受講生の年齢層が高く、固定化されてきている。老若男女問わず多様な人が集うコミュニティづくり、恒常的な場を設けるにはどうしていけばいいのか。

〈展開〉
・江戸時代までは、自由な雰囲気であった。今のマス的な就職活動の在り様等を含め、社会を作ったのはオトナである。就職活動の仕方や、どんなコミュニティに参画するのか、出会いも行動も選択肢はたくさんあり、自由に選べるということをメッセージとして若い人に伝えゆく必要があると共に、オトナ自身も選択肢の多様さに気づき自由に行動を選ぶ姿勢が必要である。個々が自分の置かれている立ち位置を相対化し、「自由」の再獲得を目指すこと。つまり、視野を広げ、新たな価値観に出会いながら、自身が納得のいく行動を取ることが重要である。一方で一般的に当たり前とされ、多

くの人が行っていることとは違う新たな行動をとることに対する他者からの評価を気にする自己にも気付く。各自が、そうした意思や新たな行動開始に伴う葛藤を乗り越えていくことが重要である。

・ブランディングが与えたいイメージと合っているか。学ぶ内容や学びの空間等、具体的なイメージの明確化が重要である。空間の選択は、イメージとも直接的に繋がりやすく、特に重要である。

□成果・課題

〈成果〉

・始めにアイスブレイクを行ったことで、後の講演やフォーラムのテーマであるコミュニティ・ファシリテーションとの繋がりを参加者がイメージしやすかったと考える。

・以下の認識を参加者と共に深められたこと。

＊「マネジメント」と「ファシリテーション」はある意味で対の概念であることが明らかとなった。(マネジメントは管理することが目的、ファシリテーションは前に進めることが目的)

＊ファシリテーションは人間関係に働きかけ、その関係性をより良好にし、各自の当事者意識を醸成する。

＊「コミュニティ・ファシリテーション」について、「足で稼ぐ」「食事を共にする」といった、待ちの姿勢ではないかかわりの重要性。

＊コミュニティの意義は、視野を広げ、自身を相対化した上で、マス的な動きに囚われずに自らの意思で選択をしていく「自由」を獲得すること。企画側がコミュニティを視野拡大・選択のきっかけとして提供する意識をもつことが重要である。

〈課題〉

今回の研究会は、「コミュニティ・ファシリテーション」という新しい領域について学ぶ機会として企画した。参加者から寄せられた声には「テーマが日常（仕事や学生生活等）と直接結びつきづらかった」というものもあり、スキルについて学ぶことを期待していた参加者もいたことがうかがえる。イベント内容についての捉え方が様々であったと思われ、企画の打ち出し方に課題があったと考えられる。今後は、内容に合ったイベント広報の方法等について改善していきたい。

F工房主催フォーラム
「ファシリテーションをふまえた能動的学習の展開に向けて」
― 今後の教育現場にそのマインドとノウハウをどう活かすか ―

□テーマ・趣旨

本学キャリア教育を実践する中で産声をあげたF工房が、来年度で8年目を迎える。近年、F工房事業はキャリア教育の枠組みを大きく越え、学部教育、共通教育、正課外活動など多岐にわたっている。こうした全学展開の流れをより本格的に推進するため、本フォーラムでは学外からコメンテータを迎え、幅広い視点から意見交換を行い、より良い全学展開に向けたヴィジョンを参加者と共に描き、共有する。延いては、次年度以降、F工房が各学部とより協働していくための契機とする。

□概要

日　時　　3月7日（月）16:30-18:30
場　所　　雄飛館 ラーニングコモンズ（パフォーミングスペース）
ｺﾒﾝﾃｰﾀ　　川中大輔氏（シチズンシップ共育企画代表）
　　大﨑理乃氏（岡山大学高等教育開発推進機構助教）
参加者　　17名

□内容

16：30～16：40 挨拶及び概要説明（F工房事業統括 鬼塚）
16：40～17：10 F工房事業の活動報告（F工房 鬼塚、鈴木）
17：10～17：40 コメンテータによるF工房事業への評価及び提言
17：40～17：50 休憩
17：50～18：30 パネル・フロアディスカッション
登壇者：川中大輔氏（シチズンシップ共育企画代表）
　　大﨑理乃氏（岡山大学高等教育開発推進機構助教）
　　小林　満氏（本学教育支援研究開発センター長）
　　鈴木　陵（F工房）
ﾓﾃﾞﾚｰﾀ：鬼塚哲郎（F工房/文化学部）

□成果・課題

F工房は2016（平成28）年度より教育支援研究開発センターに移管されることが内定しており、それに伴って全学的なファシリテーションの普及にこれまで以上に注力することが期待されている。そうした全学展開の方向性を占う議論が存分に展開されたフォーラムとなった。

※詳細は第2部（p. 82～85）を参照。

2）学内他部門との協働

■各学部

理学部　入学前教育

□テーマ・趣旨

理学部では、2009年度より、新入生が自主的に学ぶ学習習慣を身につけ、大学生活を意欲的に過ごせるよう支援するため、理学部独自の導入教育プログラム「自己の探究・理学の探求プログラム」が行われている。本プログラムの一環として、入学前に新入生が大学生活への不安を解消し、入学後、意欲的に大学生活を過ごすきっかけづくりを目的に交流プログラムが実施されている。

F工房は、今年度初めて本プログラムにかかわり、グループワーク形式のプログラムの検討、理学部在学生スタッフおよび学生ファシリテータへの事前研修、当日のサポートを行った。

□概要

日　時　　3月30日（月）10:00-12:00　※2015年度新入生を対象に、入学前に実施した。
場　所　　12号館4階各教室および演習室
参加者　　参加者92名（2015年度理学部新入生全員）、スタッフ50名（教員16名、理学部在学生スタッフ20名、学生ファシリテータ12名、F工房スタッフ2名）

□内容

［事前準備］

3月5日（木）に事務室担当者、在学生スタッフ、学生ファシリテータ複数名で当日のプログラムに関する打合せを目的としたワークショップを行い、その後プログラムをデザインした。また、3月24日（火）には、在学生スタッフと学生ファシリテータを対象とした事前研修会を運営した。

［当日のプログラム］

アイスブレイク「例えて○○」

①「自分を漢字一文字」で表現し、それをペアで紹介し合う。後半は、ペア相手と自分との共通点を漢字一文字で表現しながら、最終的に自分を表す四字熟語を完成させる。

A4用紙を4分割し、「自分のパーソナリティを漢字一文字」で表現し、用紙を見せながら多くの人とペアで自己紹介を行う。②時間を区切った時点のペアで「大学入学後何をしたいのか」について話し合い、相手の印象を「色」に例えて書き、相手に渡す。③他のペアと合流し、4人1組になり、②と違うペアの組み合わせになる。「京産大に来た理由」を話し合い、相手の印象を「単語」に例えて相手に渡す。④まだペアになっていない人とペアになり、「理学部の印象」を話し合う。その後、相手の印象を「絵」で表現し、相手に渡す。

ワールドカフェ

4人グループを作り、A4用紙を使ったフリップ自己紹介を行った。その後、ワールドカフェ形式での話し合いを3セッション行った。テーマは各セッション「いま現在の不安は

何か？」「不安を解消するにはどうしたらいいと思うか？」「大学でやってみたいことは何か？」とした。

ふりかえり

ワールドカフェの最初のグループに戻り、ワークの感想を話し合う。話合いのルールは「ポジティブ・具体的に」とし、引き出し役（ファシリテータ）として、在学生スタッフが参加した。終了後は、クラス毎に、在学生スタッフ・学生ファシリテータも混じりながら昼食をとった。

［スタッフふりかえり会］

4 月 29 日（水）15:00-16:30 に教員、職員、在学生スタッフ、学生ファシリテータ計 8 名でふりかえりを行い、アンケート集計結果をもとにセミナーの全体の成果と課題を共有した。

□成果・課題

今回、在学生スタッフと学生ファシリテータの役割の違いについての発見がなされた。学生ファシリテータは、その場の雰囲気や人間関係づくりを重視したかかわりを、在学生スタッフは、具体的な学部の勉強等に対する事柄へのサポートを重視したかかわりを行っていたことがプログラム終了後に実施した学生同士のふりかえりで判明した。事前研修時に、在学生スタッフと学生ファシリテータの役割分担について認識を深めることが必要であったと考える。

プログラム内容については、ワールドカフェのテーマとして「不安・不安解消」に比重が置かれていた。不安解消が目的ではあるが、「期待」等、前向きな印象となる別の問いからアプローチをして目的達成を目指したい。またペアワークやワールドカフェは、組合せがどんどん変わるため、顔見知りで終わった印象があると指摘がなされた。次年度は、グループを変える頻度を減らし、より個々がじっくり対話できるプログラム展開に変えることを検討する。

今年度からプログラムが新しくなったが、F 工房と教員が事前にプログラムについて共有する機会を持てなかったため、教員のクラスでの立ち位置が何かを教示する立場なのか、ファシリテータとしての見守りなのかが曖昧となった。次年度は教員の研修参加を促し、運営側が共通の認識を持ち、より一丸となった状態での場づくりを目指したい。

文化学部スターティング・セミナー2015

□テーマ・趣旨

文化学部新入生のネットワークづくりの機会を創出し、新入生の抱える不安を和らげつつ学部教育へのモチベーションを高めるイベント。

□概要

日　時　4月4日（土）10:00-12:30

場　所　11号館各教室

参加者　セミナー参加者約310名（2015年度文化学部新入生全員）、スタッフ41名（教員10名、文化学部在学生スタッフ19名、学生ファシリテータ10名、F工房スタッフ2名）

□内容

［事前準備］

事前に担当教員3名と打合せを行い、プログラムをデザイン。3月26日（木）、27日（金）には、在学生スタッフと教員を対象とした事前研修会を運営した。

［当日のプログラム］

全体を9つのクラスに分け、クラスごとに運営。各クラスには、教員1〜2名、在学生スタッフ2〜3名、学生ファシリテータ1名が配置され、運営を行った。

アイスブレイク「もじりんぐ（F工房提供）」

「自分のパーソナリティ（性格、内面、生き方）」を漢字一文字で表現し、ペアで紹介し合う。後半は「大学入学前をふりかえって」「あなたの抱いている文化学部のイメージ」などのテーマについてペアで話し、ペア相手と自分の共通点を漢字一文字で表す。最終的に、自分でオリジナルの四字熟語を完成させる。

新入生の期待と不安を共有するためのグループワーク

グループ内で「大学生活をはじめるにあたって、最も気になっていること」をテーマに話し、在学生スタッフと教員は各グループをまわり質問を受け付ける。最後は、在学生スタッフや教員が全体に向けてコメントし終了した。

［スタッフふりかえり会］

4月24日（金）17:00〜18:30にスタッフ7名でふりかえりを行い、アンケート集計結果や当日の新入生の声などを参考にしながらセミナー全体の成果と課題を共有した。

□成果・課題

いずれのクラス内にも参加者の間に安心感や連帯感が生まれていくような場となった。その意味で、「文化学部の一員だというアイデンティティ形成を目指す」という本セミナーのねらいは概ね達成できたといえる。一方で、文化学部の在学生スタッフの確保が課題として挙げられ、スケジュールを前倒しして募集準備を進める必要性などが確認された。当日の運営・プログラム面のふりかえりについては、可能であれば当日プログラム終了後に実施されることが望ましいと確認された。しかし、別途オリエンテーションのスケジュールとの兼ね合いで実施不可となる可能性もあるため企画時に確認する必要がある。

コンピュータ理工学部　新入生オリエンテーション

□テーマ・趣旨

コンピュータ理工学部で、授業開始前の時期に実施する新入生を対象としたオリエンテーション。学部の新入生同士および教員や先輩学生とのネットワークづくりの機会を創出し、安心して大学生活に馴染むきっかけの場を提供することを目的としている。

昨年度は、当日実施する内容に関するコンサルティングのみであったが、今年度はプログラム内容の企画、事前研修の実施、学生ファシリテ―タの派遣、運営のサポートを行った。

□概要

日　時　　4 月 4 日（土）12:00-13:45

場　所　　5 号館各教室および演習室

参加者　　参加者 165 名（2015 年度コンピュータ理工学部新入生全員）、スタッフ 37 名（教員 13 名、コンピュータ理工学部在学生スタッフ 16 名、学生ファシリテータ 6 名、F 工房スタッフ 2 名）

※全 10 グループ（1 グループの内訳：新入生約 16 名、教員 1〜2 名、在学生スタッフ 1〜2 名、学生ファシリテータ 0〜1 名）

□内容

［事前準備］

学部教員、在学生スタッフ、学生ファシリテ―タに向けて 3 月 25 日に事前研修会を実施した。当日実施するプログラムを体験してもらい運営のイメージを共有した。

［当日のプログラム］

フリップ自己紹介

A4 白紙を 4 つ折りにし、「出身」、「名前」、「志望動機」、「今の気分」を記入し、作成したフリップを持って教室中を移動しながらペアで自己紹介。制限時間内に多くの人と自己紹介するようにした。

ワールドカフェ風グループワーク

大学生活、勉学、課外活動、日常生活等についての期待や不安を共有し、期待は膨らませ、不安は軽減できるようなワークを実施。バースデーラインでグループ分けを行った後、グループ内で自己紹介を行った。フリップを三角柱にし、ネームプレートとして活用。オーナーとカフェ名を決め、1 セッション 20 分を 3 回実施。大学生活について感じていることを付箋紙に書いて出し合う。付箋紙は「ピンク：ワクワクしていること」、「青：不安に思っていること」、「黄：その他気になること」のように色分けした。

運営は、進行役を 1 名配置し、それ以外のスタッフはグループワークに入り「引き出す」役割として参加した。

［スタッフふりかえり会］

当日のプログラム終了後、教員、在学生スタッフ、学生ファシリテータが集い、グループ毎に運営での成果や課題、気付きについて話し合い、全体で共有を行った。

□成果・課題

教員、在学生スタッフ、学生ファシリテータ、職員の運営者全員が事前研修に参加し、ワークの体験・情報共有・意見交換ができていたことで、当日それぞれのチームワークが発揮されており、各グループに一体感・安心感ある雰囲気があったと感じる。また、当日のプログラム終了後という早いタイミングでふりかえりが実施できたことで、それぞれの立場の人が出席しやすく、多様な意見を共有できたことは有意義であった。当日の支援のみで終わらない、事前事後を含め、教職員学生が密に連携し創り上げたイベントの理想モデルとなると考え、他の依頼の際もこうした形を実現できるよう応用したい。

また、こうしたイベントをきっかけに、学部の先輩がオリエンテーションから授業での関係性づくりや勉学の支援も行う仕組みがあると、新入生をより継続的かつ定期的に支援できるのではないかと感じた。学内において初年次教育の充実化にむけた取組みが検討される中、F 工房がこうした構想を描きながら試行錯誤を続けることは、今後の全学的な学生支援体制づくりに貢献できうると考える。

各学部においてオリエンテーションの実施が集中する時期の都合上、学生ファシリテータの人数確保に課題があった。F 工房では、学生ファシリテータへの研修を例年 2 月に行っている。前述の課題については、この研修段階で念入りに呼びかけると共に、学部の先輩学生がファシリテータとしてさらに活躍できるような研修づくりを検討していきたい。

■その他
フレッシャーズ・コミュニケーション2015

□テーマ・趣旨

新入生120名を対象とした2日間のプログラムである。本学の教員、在学生、卒業生がアドバイザーとしてサポートする。寝食を共にしながら、交流を深め、大学生活での目標等について話し合う。F 工房は、在学生アドバイザーへの事前ファシリテーション研修、プログラム企画およびプログラム実施後のふりかえりのサポートを行った。

□概要

［事前研修］

日　時　3月27日（金）16:00-18:00
場　所　万有館 ぷらっとプラザ
参加者　在学生アドバイザー13名、職員2名、F工房スタッフ2名

［当日］

日　時　4月11日（土）13:00 - 12日（日）13:30
場　所　京都産業大学、あうる京北（京都府立ゼミナールハウス）
参加者　新入生120名、在学生アドバイザー16名、教員8名、職員18名、卒業生8名、F工房スタッフ1名（※F工房スタッフは同窓会スタッフとしてボランティアで参加）
※全8グループ（1グループの内訳：新入生約15名、教員アドバイザー1名、卒業生アドバイザー1名、在学生アドバイザー2名）

［在学生アドバイザーふりかえり］

日　時　4月12日（日）15:45-16:30
場　所　神山ホール3階セミナー室2
参加者　在学生アドバイザー18名、職員3名、F工房スタッフ1名

□内容

［事前研修］

在学生アドバイザーに向けてファシリテーションの定義や考え方をレクチャーし、当日実施するプログラムを体験しながら、案を詰める作業を行った。

［当日］

フリップ自己紹介（1日目昼：グループタイム①）

A4用紙を4つ折りにし、それぞれ「氏名」「出身」「学部」「参加動機」を記入し、ペアを組み、記入内容について紹介。これを繰り返し、アドバイザーを含めたなるべく多くのメンバーと自己紹介をし合う。神山ホールでの開会式後の記念撮影の間に行った。

しゃべり場の準備（1日目夕）

グループタイム②で行う「しゃべり場」の準備。「大学生活（学内・学外それぞれ）についての期待ややりたい事、不安や聞きたい事」についてどのようなことを話したいかを個々で明確にし、用紙に記入する。

しゃべり場（1日目夜：グループタイム②）

大学生活を充実したものにするため、どのようなことができるか、どのようなことを目指すかについて考えるセッションである。各アドバイザー4 人が中心となるグループを 4 つ作り、自己紹介をした後、準備した紙を使用しながら大学生活に対する期待や不安について話し合う。各グループの話し合いを 1 セット 15 分とし、全員が 4 人のアドバイザーと話せるよう回す。4 セット終了後、グループ全員で円になり、アドバイザーが各グループで出た意見や話を踏まえて参加者にメッセージを送る。

野外スポーツ大会（2 日目朝：グループタイム③）

野外でのスポーツ活動（グループ対抗ドッジボールや大縄跳び等）を通じて親睦を深めた。

まとめセッション（2 日目昼：グループタイム④）

1 泊 2 日のまとめとして、A4 用紙フリップに「大学生活での自分の目標」を記入。

グループ全員で円になり、フリップの内容やイベントの感想等を含め 1 分以内で発表した。発表終了後には寄せ書きを作成。

［在学生アドバイザーふりかえり］

運営についての課題や成果学びについてグループ毎に話し合い、全体共有を行った。

□成果・課題

在学生アドバイザーを中心にグループの運営を行った。アイスブレイク、しゃべり場、野外活動という流れは、関係づくり構築による安心感、期待や不安を率直に共有しあえることによる自己や他者の発見、グループや新たにできた友人でより親睦を深めるという自然な人間関係づくりが達成できている。

一方で、新入生参加者にプログラムが周知されておらず指示が通りにくかったことや、運営についての不明点をグループ内のアドバイザーや職員にどう共有するか等の連携方法については改善の余地がある。新入生向けにプログラム概要の配布を行う、教員アドバイザー、卒業生アドバイザーおよび同窓会スタッフの職員に対してプログラム内容の詳細を説明する、職員が回遊し相談に対応する、1 日目終了時に在学生アドバイザーと情報共有を兼ねたふりかえりの場をつくる等の対策を検討したい。

2015年度 私立大学図書館協会 西地区部会京都地区協議会 第1回研究会

□テーマ・趣旨

私立大学図書館協会西地区部会が毎年開催している「京都地区協議会」の今年度第1回研究会が本学で開催されることとなった。これまで講義中心だった同研究会に、今回は参加者同士が関わり合うグループワークを取り入れたいという本学図書館の意向があり依頼を受けた。F 工房は、当日のプログラムのうちグループディスカッション部分および学生ファシリテータを対象とした事前研修のプログラム設計、学生ファシリテータの募集、当日の運営後方支援を担った。

□概要

［事前研修］

日　時　6月19日（金）13:00-16:00

場　所　図書館1階 図書館ホール

参加者　図書館サポートチーム「ビブリア」学生1名、学生ファシリテータ3名、図書館職員5名、F 工房スタッフ2名　※事前研修に参加できなかった学生ファシリテータ2名への個別フォロー研修は7月2日（木）に実施した。

［当日］

日　時　7月3日（金）13:00-17:00

場　所　図書館1階 図書館ホール

参加者　参加者50名、スタッフ13名（図書館サポートチーム「ビブリア」学生1名、学生ファシリテータ5名、図書館職員5名、F 工房スタッフ2名）

□内容

［事前研修］

レクチャー「図書館の学修支援について」

図書館の運営担当職員より、今回の研究会の概要や、大学における学修支援について基礎的な理解を得るための講義を提供いただいた。

グループワーク実践

当日、ファシリテータを担当する学生の中から2名の実践者を決め、グループワークのデモンストレーションを行った。

ふりかえり

グループワークを実践してみて気がついたこと、質問したいこと、不安な点などを分かち合った。

［当日］

【講演】

13時から14時までは「学習支援に生き残りの途を探る －大学図書館（員）のひとつの未来－」と題し、同志社大学学習支援・教育開発センター事務長である井上 真琴氏による講演が行われた。

【グループディスカッション、発表】

アイスブレイク

5〜6名のグループに分かれ、A4用紙に「所属」「氏名」「担当業務」「気になっていること（趣味・ニュースなど公私問わず）」を記入しグループ内で発表し合った。

ディスカッション（1）「各館で力を入れている取組は？逆に課題は？」

2つ折りにしたA4用紙の左側に「各館で力を入れている取り組み」、右側に「課題」を箇条書きで記入し、グループ内で共有した。

ディスカッション（2）「自館の学修支援についてどう思う？講演で聴いた学修支援についてどう思う？」

考え・意見を付箋紙に書き出して共有する形式で、自館の学修支援について感じていること、講演の感想、自館の今後の学修支援についての考えなどをテーマに話し合いを行った。学生ファシリテータは、自分が受けたことがある学修支援や今後受けてみたい学修支援についても利用者の視点から発言した。また、話し合った内容については模造紙にまとめ、会場全体に向けて発表するための準備にも取り掛かった。

発表

1グループあたり20分の持ち時間で、模造紙に書き込んだ内容を見せながら会場全体に議論の結果を発表した。

講評

講演に登壇された講師の井上氏による講評がおこなわれた。参加者からの発表内容を受け、図書館（員）が今後持っておくべき心構えなどについてコメントがなされた。

ふりかえり

アンケート用紙が配布され、個々人で記入する形でふりかえりの機会が持たれた。参加者同士でこの日のプログラム内容や感想について話し合いながら記入しているグループも見られた。

□成果・課題

各館の取り組みや課題、テーマ「大学図書館と学修支援」についての各自の意見発表、それを受けての意見交換も活発に行われた。参加した図書館職員同士の情報交換だけでなく、それぞれの関係性も築くことができたといえる。また、日ごろ学生ファシリテータとして活動している学生が5名、図書館サポートスタッフ「ビブリア」の学生が1名各グループにファシリテータとして参加したが、学生の立場からの意見が得られたという点について参加者から高い評価の声が寄せられていた。

一方で、参加者同士が情報交換する中で見えてきた課題に対して「どのように行動すればよいか」といった今後につながる意見交換が十分にできなかった。今後、KJ法をはじめとした意見交換のためのツールの用い方の手順の検討や、適切な目標設定を行うといった改善が必要だと考えられる。

ティーチング・アシスタント（TA）研修会

□テーマ・趣旨

本研修は、教員が TA の役割を十分に理解した上で活用するとともに、TA 自らもその役割を認識し、業務にあたることができるようになることを目的としている。

第 1 部は教学センターより、TA 制度の目的や役割等についてガイダンスを行った。第 2 部は、学長室（教育支援研究開発担当）によるグループワークの運営で、TA の院生が業務に対して具体的なイメージを持ち、学部教育の充実に向けた TA の役割について考える機会を提供した。F 工房は学長室（教育支援研究開発担当）より依頼を受け、TA 研修会第 2 部で実施するグループワークのデザインや学生ファシリテータの派遣、ファシリテータとして当日グループワークに参画した。

□概要

日　時　　4 月 6 日（月）14:00-16:30
場　所　　12 号館 12402 教室、12403 教室
参加者　　参加者 113 名（教員：57 名、TA：56 名）、スタッフ 25 名（学生ファシリテータ 13 名、職員ファシリテータ 2 名、職員 9 名、F 工房スタッフ 1 名）

□内容

教育支援研究開発センター、教学センター職員と共に検討した当日の運営内容を紹介する。

アイスブレイク（自己紹介）

A4 用紙を 4 つ折りにし、「所属」「氏名」「今の気分」「第 1 部を受けての TA のイメージ」記入し、グループ内で共有。

ブレーンストーミング「あなたの TA サマサマ体験とは？」

TA は「TA をやっていてよかったこと」、教員は「TA を採用してよかったこと」、今年度より新規で活動する TA と職員および学生ファシリテータは、「こんなときに TA がいてくれたらよかったのにと思ったこと」について、付箋紙に思いつく限り記入し、共有。

発展ブレーンストーミング「TA よ、君はもっと輝ける！」

「こんな TA がいたら嬉しい！」「TA がこんなことしてくれたら素敵！」について、付箋紙に思いつく限り記入し、目指したい TA 像、期待する TA 像について考え、グループ内で共有。その後、各グループの代表者が、グループで話し合った内容、自身の決意表明について発表。

□成果・課題

ガイダンスとグループワークを組み合わせることで、実際に春学期からどう行動するかについてイメージしやすく、また教員や TA 同士のネットワーク構築のきっかけになったと考える。グループ分けについて、文理混合で行ったが、理系と文系では TA の役割も異なるため、次回以降は分けて行う必要があるという意見もあった。

学長室（教育支援研究開発担当）職員へのファシリテーション研修
― 本学流ファシリテータマインドの獲得とTA研修会準備演習 ―

□テーマ・趣旨

学長室（教育支援研究開発担当）からの依頼を受け、教育支援スタッフ向けのファシリテーション研修を行った。この研修は、教育支援が主催するTA向け研修会の「準備演習」という位置づけとなっており、TA 研修会においてグループ・ファシリテータを担う教育支援スタッフが研修当日の進行イメージを持つことや、「ファシリテーション」に関する共通体験や共通理解を持つことを目的に実施した。

□概要

日　時　　9月10日（木）13:45-16:30
場　所　　雄飛館 ラーニングコモンズ（パフォーミングスペース）
参加者　　参加者10名、F工房スタッフ2名

□内容

アイスブレイク体験「共通点グランドスラム」

TA研修会のイメージを掴むため、当日実際に行うアイスブレイクを体験した。

ミニレクチャー「ファシリテーションとは？」

参加者の抱いているファシリテーションについてのイメージを聞きながら、ファシリテーションの一般的な定義や基本的なスキル、本学における「ファシリテータマインド」の特徴について紹介した。

グループワーク実践

参加者が2グループに分かれ、当日に近い形式でグループファシリテーションを実践した。テーマ（「学生対応をしていて、嬉しかったこと／大切にしていること／困ったこと／悲しかったこと」等）の書かれたカードを参加者自らが選びそのテーマについて話し合うという内容で、参加者全員が10分ずつファシリテータ役を担った。

ふりかえり

グループワークへの参加やファシリテーション実践をしてみての気づきや感想、よかった点や改善できる点などについて、付箋紙に書き出してグループ内で共有した。F 工房スタッフからは、ファシリテータの振る舞いや、グループメンバー同士の影響関係の変化などのプロセスに焦点を当てたフィードバックを行った。

□成果・課題

グループワーク実践においては、対等で率直な意見交換の時間を持つことができた。また、話し合いのテーマを「学生対応」としたことで、話し合いのコンテンツ自体によってもファシリテーションや人との関わり方について考える効果を生むことができた。一方、ミニレクチャーに内容を詰め込み過ぎている、「一般的なファシリテーション」の概念と「本学におけるファシリテータマインド」の違いがわかりにくいといったコメントもいただいており、両者の共通点やちがいを明らかにし、端的な言葉で表現するなどして講義内容を洗練させることが今後の課題として挙げられる。

私立大学キャンパスシステム研究会

□テーマ・趣旨

私立大学キャンパスシステム研究会は、キャンパスシステムのあらゆる分野で、大学の垣根を越えた共同研究や調査、イベントの企画・開催を行うことを目的に設立された研究会である（前身は富士通ユーザー会）。

2015 年度第 4 回第 1 分科会（「教育・研究」）の 1 日目が本学で開催された。活動テーマは「聞くだけの授業は終わり―深化する大学授業に学ぶ―」である。

F 工房は、第 4 回のテーマである「教職学協働による正課、正課外の学び支援」に基づき、「若手職員や先輩学生が『ファシリテータ』として参画する授業」と題し、授業の実践報告を行った。

□概要

日　時　　10 月 22 日（木）13:10-14:15
場　所　　雄飛館 ラーニングコモンズ
参加者　　参加者 46 名、学生ファシリテータ 3 名、F 工房スタッフ 3 名

□内容

6 人前後のグループを作り、自己紹介を行った後、低単位・低意欲層の学生を主な対象とした「キャリア・Re-デザイン」科目および、新入生の 3 分の 2 にあたる 2000 名を超える学生が春学期に受講するキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」（いずれも、参加型授業）について、授業概要、学生ファシリテータ・職員の参画と体制について紹介を行った。その後、グループ内で質問を考えてもらい A4 用紙に記入、ホワイトボードに貼りだし、それぞれの質問に教員・職員・学生ファシリテータで分担しながら回答した。

□成果・課題

質疑応答では、学生ファシリテータの体制や成長実感等について、参加型授業において積極的に参加しない学生への対応、必修化にしない理由、学生が科目を選ぶ理由、受講することによる変化、授業の告知方法、「キャリア・Re-デザイン」科目における学生の継続出席の工夫、退学者数の減少の有無など幅広い質問が寄せられた。学生ファシリテータに関する質問は、当事者より活動における成果や課題意識について回答できたことが参加者にとってインパクトがあったように思う。分科会の運営を教職員学生協働で行う意義を感じた。

第7回、第8回学部FD/SD推進ワーキンググループ

□テーマ・趣旨

学長室（教育支援研究開発担当）から依頼を受け、「学部 FD/SD 推進ワーキンググループ」における話題提供をおこなった。F 工房が発行した「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」冊子の内容をワーキンググループで共有することにより、各学部の教育プログラムや各部局における業務等でそのノウハウやツールが活用され、学内でのアクティブラーニングがより推進されることを目指した。

□概要

日　時　　1 月 6 日（水）15:30-17:00、2 月 3 日（水）15:30-17:00
場　所　　5 号館 ミーティングルーム 2（1 月 6 日）、10 号館 10507 中会議室（2 月 3 日）
参加者　　参加者 18 名（1 月 6 日）、17 名（2 月 3 日）、両日とも F 工房スタッフ 2 名

□内容

【第７回】「アクティブラーニング・パッケージの紹介とディスカッション」

話題提供

F 工房が発行した「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」の内容および作成の背景に加え、冊子作成後に実施したヒアリングの結果を共有した。

ディスカッション

「授業や学習支援領域において、ご自身が最も売りにしたい取組の理想と現実」をテーマにグループで議論した。プログラムの最後に、各グループの議論の内容について全体で共有した。

【第８回】「アクティブラーニングとその実践」

小講義

アイスブレイクの導入事例やその効果の紹介などを交えながら、アイスブレイクの定義やその意義について情報提供をおこなった。

アイスブレイク体験

参加者同士のアイスブレイクとして「フリップ自己紹介」をおこなった。「学生との関わる中で、教員をやっていてよかったと思うエピソード」等の項目を交えることで、教員相互の関係性の構築を試みた。

アイスブレイク実践とふりかえり

全員がアイスブレイクを実践するファシリテータ役を担うことを目指し、短時間のアイスブレイク実践をおこなった。グループ内で順番に 1 名ずつファシリテータ役となり、「共通点グランドスラム」「３つ選んで自己紹介」を実践し、ふりかえりをおこなった。ふりかえりの進行は F 工房スタッフおよび学長室職員が担い、ファシリテータの振る舞いについて気がついたことの共有とフィードバックや、実際にアイスブレイクを授業に導入する際の注意点や課題について話し合った。

□成果・課題

【第７回】

後半のディスカッションを通じて、様々な学部の教員同士で専門教育におけるノウハウやニーズの掘り起こしをおこなうことができた。ディスカッションでグループ毎に作成された模造紙のコメントからは、アクティブラーニング導入に伴う時間的な制約や、学生同士が議論する下地となる基礎知識の理解の不足といった課題が共有された。

一方で、ファシリテーションの具体的なイメージを掴むことやパッケージの効果を実感する機会が不十分だった点が課題として残った。

【第８回】

ふりかえりシートには、この日体験／実践したアイスブレイクについて「同様のことを授業でもやってみたい」「主体的に意見を出し合う際に使えると思う」「演習授業で使ってみたい」といったコメントが寄せられた。これらの記述から、アイスブレイクの効果を体感し、その導入を検討できる機会は一定提供できたといえる。また、ワーキング参加教員から個別にコンサルティング相談を受けるなど、今後の展開につながる動きも生まれた。

一方で、アクティブラーニングの導入については「専門科目（特に理系分野）への親和性があるのかどうか」「アイスブレイクを導入した際、コミュニケーションに困難を抱えた学生にどう対応するか」といった問題提起も寄せられた。今後は専門科目への導入事例やその効果を具体的に示していくとともに、アクティブラーニング導入の阻害要因の分析をおこない、次年度以降のパッケージ内容やＦ工房の事業展開に反映させていきたい。

体育会支援セミナー OBによる勉強会

□テーマ・趣旨

進路・就職支援センターが開催している体育会学生に特化した「就活対策セミナー」は、今年で4年目の取組みである。12月中旬にガイダンスを行い、その後、就職活動への取組み方、自己分析、ES作成とステップを踏み、2月より面接対策に関するレクチャー、及びロールプレイング等が複数回に分けて実施される。F工房は、面接におけるフィードバックの効果をさらに高めたいという相談を受け、アレンジを行った。2日間同じプログラムが開催され、1日目においてアレンジ部分の運営を担当した。面接対策では、3人1組になり、面接官役、受験者役、オブザーバー役に分かれ、面接のロールプレイングを行い、12分間のロールプレイングの後にフィードバックを行った。

□概要

日　時　　3月4日（金）9:15-12:30
場　所　　1号館学びのスペースB
参加者　　参加者6名、講師1名、F工房スタッフ1名

□内容

情報交換会

就職活動に関するそれぞれの状況について情報交換を行った。

面接ロールプレイング

3人1組になり、面接官役、受験者役、観察者に分かれて、実施した。事前に観察や「ジョハリの窓」に関するレクチャーを行い、フィードバックの意義について共有した。

観察者は、面接の様子を観察シートに記入した。

個人ふりかえり

面接官役には受験者へのフィードバックシート、受験者にはふりかえりシート、観察者には、シートのフィードバック欄に記入した。

共有

シートをもとに、面接の様子や、受験者役として気付いた点（強みや課題）についてグループでフィードバックを行った。受験者は、もらったフィードバックを書き留めた。

ふりかえり

再確認した自分の良さや強み、改善点、課題を解決するために今後のクラブ活動や、日常生活においてチャレンジしていきたい事について各自ふりかえり、共有を行った。

□成果・課題

シートを導入したことで、まず個人の考えを整理してから、意見交換を行うことが出来、よりお互いの事を具体的にフィードバックし合える機会になったと考える。各自の持ち味を引き出し合うツールとして有効である。時間配分、書き方については臨機応変に個別に対応する必要がある。フィードバックの時間については講師やファシリテータが記載された事について掘り下げることでより意見交換が深まることもあった。ツールとサポートの両立による支援の重要性を感じた。クラブ活動そのものへの応用可能性も考えていきたい。

3）授業の支援

■キャリア形成支援教育科目

キャリア・Re-デザイン

《授業運営》

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

大学の勉学に対して意欲の低い状態にあり、結果として低単位の状態におかれている学生、もしくは、大学から職業世界への移行に関して困難を抱える学生を主な対象とした科目。〈自己開示〉→〈自己概念の確立〉→〈社会への目線づくり〉→〈キャリア意識の再構築〉というプロセスをたどることで、受講生のモチベーションの再発見とキャリア形成を支援する。

□概要

日　時　　［春学期・秋学期共通］不定期水曜日 3-4 限連続授業および 1 泊 2 日の合宿授業
場　所　　［春学期・秋学期共通］
〈初回授業〉5 号館 5303 教室他〈通常授業〉5 号館 2 階、3 階　各演習室
〈合宿授業〉あうる京北（京都府立ゼミナールハウス）
参加者　　［春学期］受講生 67 名、ファシリテータ 16 名（教員 5 名、学外関係者 6 名、学生 4 名、F 工房スタッフ 1 名）
［秋学期］受講生 127 名、ファシリテータ 23 名（教員 6 名、学外関係者 9 名、学生 6 名、F 工房スタッフ 2 名）

□授業運営

第 1 回（オリエンテーション、全体授業）

「アートコミュニケーション」と「自分史を語る」という、2 つのワークショップを実施。グループでの協働体験や自己開示など、本科目での肝となるワークを体験した後に、履修を希望する学生のみ手続きを行う。

第 2 回（クラス授業）

クラスでの初顔合わせ。アイスブレイクを中心に行いながら、クラスが自らの居場所となるよう受講生どうし、受講生とファシリテータの関係を構築する。

第 3 回（合宿授業）

本年度より、童話などをもとにオリジナルの物語を創作する「物語創作ワークショップ」を実施。非日常の時空間において、クラスもしくはグループでの信頼関係を構築しつつ、「対話（価値観の衝突や摺り合わせを伴うコミュニケーション）」ができるための基礎体力をつける。合宿 2 日目は、自分の価値観やキャリア観を再考し、自身のキャリアテーマを発見する。また、第 4 回で実施する「社会人インタビュー」の準備をしながら、社会へ目線を向ける作業を行う。

第 4 回（クラス授業）

「社会人インタビュー」の実施。グループごとに 2 人の社会人（今までキャリアチェンジを行ってきた人を中心に招聘）へインタビューをし、仕事世界で働く他者と対話をする。

第5回（クラス授業）

「社会人インタビュー」を個人・グループで振り返りながら、そこでの学びを個人に落とし込む。そして、自らの課題を整理しつつアクションプランを作成する。

第6回（クラス授業）

クラスメンバーに向けた「5 分間スピーチ」を実施。自ら作成したアクションプランを発表することで、自己/他者とのより深い対話を実践する。スピーチ後は、メンバー全員がスピーカーに対するフィードバックコメントを書き、最後にそれを交換し合うセレモニーを行って授業を締めくくる。

□成果・課題

開講から丸10年を迎えた本科目は、今年度もファシリテーションの考えに基づく支援型教育の充実を図り、学生のモチベーションの再発見を支援した。これまで計20期の総受講生数は1,979名となり、毎学期約100名の学生が受講する形が継続されている。

F工房スタッフはファシリテータとしてクラスに関わり、各回のプログラム・デザイン、運営、ふりかえりに携わった。本年度は、合宿授業のプログラムに「物語創作ワークショップ」が取り入れられた。このワークショップは昨年度開講されていた「キャリア・Re-デザインⅡ」で実施した「ラジオドラマ制作」の「個人での創作を通じて自己と向き合う」「創造的な作業を通じて答えのない問いと向き合う」といった要素を取り込んだもの。物語に受講生自身の姿が投影されたり、クラス内で互いの発表に耳を傾ける様子などから、じっくりと自他と対話する機会となったことがうかがえた。

授業については、各回、自分や他者について深く話すことから、「こんなにまじめな事を話すとは思っていなかった。」など、新鮮さ、戸惑いどちらとも捉えられそうな声もあった。

また、授業コンテンツについては、全員が自分について考えるきかっけとして捉え、向き合ってほしいと思う。しかし、自分について深く考える機会として活かす学生と、表面的にこなす学生等さまざまである。このことから、運営側のスタンスやコンテンツ内容・提供方法について検討の余地があるということだと考えられる。一人ひとりが自己と向き合えるような雰囲気作りをするために運営側自身ができることをその都度の状況をみながら判断していきたい。

自己発見と大学生活

《授業運営》

□授業の趣旨

本科目は、春学期、1 年次生を対象に開講している初年次向けキャリア形成支援教育科目である。今年度は、1 クラス 76〜78 名のクラスを 26 クラス設け、合計 2,016 名の新入生が受講した。

本講義では、「アウェイ」と「ホーム」を次のように定義し、大学という環境を活かした自分自身にとって意義のある「4 年間」を過ごせるよう、グループで様々な活動を行う。「アウェイ」とは、自分が周囲との関係性において、どのような特徴を持っているのかはっきりせず、周囲の多様な人々とどのように関わっていくべきか、方針が定まっていない学習者の状態を指す。「ホーム」とは、自分が周囲との関係性において、どのような特徴を持っているのかについてある程度理解しており、周囲の多様な人々とどのように関わっていくべきか、なんらかの方針を持っている学習者の状態を指す。本講義では、上記の「ホーム」に至るために環境と自分を結び、関連付け、学習意欲を高める力、すなわち「環境に対し積極的に【自分の方針】を持てる力」の獲得を目指す。具体的には、今置かれた環境を理解し、【自分の方針】を立てるのに必要な力を付けるためのグループワークを実践する（2015 年度シラバスより一部引用）。

なお、本科目では学生ファシリテータ（学ファシ）が先輩として授業をサポートする。

□概要

日　時　　［春学期］毎週月曜・木曜 1、2、5 限、火曜・金曜 1、5 限、水曜 1〜3 限（同一時限に各 2 クラス開講）
場　所　　5 号館 12402 教室、12403 教室
参加者　　受講生 2,016 名、教員 26 名、学生ファシリテータ（学ファシ）56 名

□授業運営

本科目では、授業の教案集である「ティーチング・ガイドブック」をもとに、全クラス同一コンテンツにて授業運営を行っている。各回の授業内容は以下の通り。

第 1 回　オリエンテーション　—自己表現とフィードバックを通じた授業体験—
第 2 回　対話を通して知る自分　—私が人生で大切にしてきたことは何だろう—
第 3 回　大学生活を考える　—大学生活のエピソード創りとパフォーマンス体験—
第 4 回　大学生活を文章で表現する　—アカデミックライティング・ピアレビュー体験—
第 5 回　「先輩インタビュー」　—関心をもち、問いかけを学ぶ体験 Ⅰ—
第 6 回　「大学生基礎力レポート」を通して知る自分　—適性検査の使い方—
第 7 回　「キャリア・インタビュー」発表　—社会人のキャリアデザインを聞き、まとめ、発表する体験—
第 8 回　「社会人の先輩インタビュー」　—関心をもち、問いかけ学ぶ体験 Ⅱ—
第 9 回　大学生活を産（む）すぶ　—グループワーク① ストーリー創りと協働の基本を学ぶ—
第 10 回　大学生活を産（む）すぶ　—グループワーク② パフォーマンス創作Ⅰ—
第 11 回　大学生活を産（む）すぶ　—グループワーク③ パフォーマンス創作Ⅱ—

第 12 回　大学生活を産（む）すぶ　―グループワーク④ パフォーマンス創作Ⅲ―
第 13 回　クラス発表会　―グループパフォーマンス体験―
第 14 回　合同クラス発表会と学びの振り返り　―クラス代表パフォーマンスを見て、グループへの貢献と授業の学びを振り返る―
第 15 回　チャレンジシート「私の大学生活」　―自分が満足する大学生活を産（む）すび、実践へとつなげる 1 分間―

□成果・課題

今年度は、授業コンテンツの大幅な見直しを行った。昨年度は全 24 クラスを半分に分けて実施した合同発表会を 2 クラス合同での発表形式に変更、受講生同士の関係性構築のための授業回を減らし、グループワークに充てる授業回数を増やした。また、アカデミックライティング・ピアレビューを組み入れるなど、大学で学ぶ上での基礎的なスキルの習得も念頭に置いた。

グループワークにおける発表内容については、単位を取ることの重要性を訴えるものや充実した大学生活を送れている人とそうでない人の対比等、似たような内容が多かった。

昨年度より実施されている教員のランチタイム・ミーティングは本年度も継続して実施された。週に一度、任意で集まった上で授業内容や学生、学ファシの様子などについて意見交換が行われ、グループワークが苦手な学生の対応に関する話題がよく挙がった。多様な学生がいる中、80 人規模で参加型授業を運営することによって様々な不測の事態が起こることもあり、教職員、学生ファシリテータそれぞれが都度の臨機応変な対応や知識が必要とされる。大規模科目において、運営スタッフで議論を重ねながら、様々な事例を蓄積し、現場の行動に活かせる知識として提供することが、今後の F 工房の活動ニーズの 1 つになると考えられる。

《学生ファシリテータ活動》

□概要

日　時　［学ファシの集い］
第 1 回～2、3 年次生対象～5 月 13 日（水）15:00-17:00
第 1 回～4 年次生対象～　5 月 18 日（月）16:00-18:00
第 2 回　6 月 1 日（月）15:00-17:00
［学ファシふりかえりの集い］9 月 17 日（木）10:00-18:00

場　所　［学ファシの集い］11 号館 11406 教室（5 月 13 日のみ）、1 号館学びのスペース B
［学ファシふりかえりの集い］4 号館 4H 演習室、4I 演習室

参加者　［学ファシの集い］のべ 40 名、教職員 8 名
［学ファシふりかえりの集い］のべ 28 名、教職員 7 名

※別途　授業開始前に研修を 4 回（8 日程）実施。
［学ファシ研修 第 1 回］2 月 20 日（金）、24 日（火）
［学ファシ研修 第 2 回］3 月 3 日（火）、6 日（金）
［学ファシ研修 第 3 回］3 月 10 日（火）、13 日（金）
［学ファシ研修 第 4 回］3 月 17 日（火）、20 日（金）

□内容

学ファシとは「学生ファシリテータ」の略称で、「自己発見と大学生活」科目等の授業や催事において、先輩として授業をサポートする学生のことを言う（無償の活動である）。本科目における学ファシは各クラスに2〜3名ほど配置され、受講生をサポートするため、授業でのアイスブレイクの実施やグループワークの支援、プリントの配布、記録撮影、教室空調・照明管理、教員との連携（役割分担や、受講生の様子の報告、授業内容の打合せ、実施後のふりかえり）が主な活動である。加えて、1 人の先輩学生としてモデル的な役割も間接的に担っている。今年度は、公募で集まった56名の学生が同活動に参加した。

F 工房は、学ファシ活動の支援として、授業開始前に4度の研修、授業期間中は、各クラスの打合せやふりかえりに適宜参加するとともに、クラス横断型「学ファシの集い」を行った。なお、学年や経験年数によってニーズが異なることが見込まれることから、今年度の「学ファシの集い」は学年別に開催することを試みた。そして、授業終了後には、活動を通しての各自の学びをふりかえり、話し合う「学ファシふりかえりの集い」を行った。

事前研修においては、実際に学ファシが運営する授業内容の体験や、説明する際の話し方のポイントについてのレクチャーや実践、ファシリテータとしての観察するスキル、グループワークの支援に入る際の話し方についての検討、ふりかえりの方法など、授業サポートに入るにあたって必要とされるスキルや考え方について、体験を交えて学んだ。

授業開始後については、各クラスで起こるそれぞれの事例をその都度話し合い、集いにおいても情報共有を行った。

□成果・課題

今年度は56名が学ファシとして活動し、各々の担当クラスにおいて教員と連携しながら授業運営やグループワークのサポート役を担った。また、今年度は学ファシが活動する上での心構えをまとめた「学ファシガイドライン」を有志の学ファシが中心となってまとめ、発行した。これは法学部のSA養成授業2科目においても活用されている。

学ファシのふりかえりシートには「人前に出ることが苦でなくなった」「回を重ねるごとに授業のアレンジを提案できるようになった」「毎回の反省点を次に活かせるようになった」などの記述が見られ、授業での活動を通じて自らの成長を実感している様子がうかがえる。一方で「自分の役割ってなんだろう？」「どの程度介入すべきか悩んだ」といった記述に見られるような「授業の中で直面する困難」について、担当クラスメンバー内での話し合いを通じて解消されているクラスもあれば、そうでないクラスも見受けられた。今後は、学ファシ同士が担当クラスにかかわらず気軽に相談し合えるような関係性や、学ファシ間における相互のフィードバックが促進される機会づくりがいっそう必要であるといえる。

なお、学ファシの募集方法について、これまでは「自己発見と大学生活」科目で活動する学ファシを募集し、それ以外の授業・課外活動等の支援についてはその都度、参画希望者を募る形を取っていた。次年度は募集段階から同科目以外の活動機会も積極的に提示することで、学ファシがより多様な現場での活動経験を積むことを促していきたい。

■学部専門科目

法学部演習（久保先生）

□授業の趣旨

裁判外紛争処理を扱う演習科目の第2回授業において、「コミュニケーション・トレーニング」のワークを実施。グループワークのレベルアップを図ることおよび、結果が求められるグループワークを通して、グループワークにおける自分の振る舞いについてメタ認知を得られるようなることを目的に実施した。

□概要

日　時　　4月17日（金）4限
場　所　　4号館4I演習室
参加者　　受講生36名（3年次と2年次の混合演習）、学生ファシリテータ1名、F工房スタッフ2名

□授業運営

教員によるグループ内自己紹介の後、グループメンバー同士の積極的な情報開示を促すためのアクティビティ「丸の上に丸」を実施。続いて、情報カードゲーム「潜入！顔文字ミュージアム」を実施した。

その後グループ内でふりかえりの時間を持ち、グループワークがうまくいった要因、うまくいかなかった要因について考察を深めた。

□成果・課題

冒頭の担当教員による自己紹介ワークによって関係性が深まったためか、比較的どのグループも課題に対して積極的に取り組む様子が見られた。また、導入アクティビティ「丸の上に丸」についても受講生が積極的に参加する姿勢が見られ、のちの情報共有ワークショップのポイントとなる「自分の持っている情報を開示する」という行為を促す働きがあったと推測できる。早い段階で課題を達成したグループについては、雑談の時間に移行する傾向が見られたため、ふりかえりにおいて何段階かに分けて考察を深められるような工夫が必要だと考える。

法学部演習（岩永先生）

□授業の趣旨

法学部の岩永昌晃先生が、自身の4年次ゼミ生とともに高大接続授業（高校3年生）を担当されている。昨年度の反省点として、授業に関わるゼミ生のファシリテーション能力向上が課題として挙げられていたため依頼を受けた。高大接続授業において、少人数の高校生のグループにメンターないし、ファシリテータとして自信を持って関わるようになることを目的に全2回のプログラムを実施した。

□概要

日　時　［第1回］10月16日（金）、［第2回］23日（金）3限
場　所　5号館5228演習室
参加者　［第1回］受講生7名、［第2回］受講生13名、各回ともF工房スタッフ2名

□授業運営

［第1回（10月16日）］

ミニレクチャー「ファシリテーションの基礎」「参加型の場をどうデザインするか」

事前に参加型の授業内容を自ら設計し、当日はファシリテータとして高校生と関わるにあたり、ファシリテーションの定義や機能、参加型の場を設計するにあたっての基本的な視点などについて情報提供した。

ワーク（1）「プログラムを作成する」

授業回ごとの担当者同士で集まり、ミニレクチャーの内容を参照しながらプログラム内容の設計、検討を行った。ゼミ内で利用されているオンラインツール「サイボウズ」を利用して事前にプログラムのたたき台を提出している班もあり、適宜担当教員やF工房スタッフからのアドバイスを交えながら議論した。

ワーク（2）「プログラムを客観的に検討する」

プログラム設計の進捗状況や困っている点などについて、ゼミ全体で共有をおこなった。時間配分や趣旨に即した問いの選び方などが課題として挙がった。また、昨年度の内容を踏襲するプログラムを担当する班は、高校生の目線に立って質問内容を検討し直すなどの工夫をおこなった。

［第2回（10月23日）］

グループワーク実践「障害者雇用に関するディスカッション」「どっちの企業ショー」

ゼミ生がプログラムの運営側・参加者側に分かれ、自身が設計してきたプログラムを実践した後にふりかえりをおこなった。ふりかえりにおいては、ファシリテータ役を担ってみて抱いた感想、参加の体験してみて得られた気づきなどを共有し、高大接続授業当日に向けた改善点を確認した。

ミニレクチャー「ファシリテータの役割」

ふりかえりの後、F工房スタッフより高大接続授業に臨むにあたってのファシリテータとして意識したいポイントなどについての情報提供をおこなった。

□成果・課題

事後アンケートには、実際に高大接続授業の場でどのような役割を担えばよいかがイメージできた、という声が寄せられた。その一方で、「グループワーク実践」では実際にゼミ生が設計したアクティビティを実習内容に選んだため、ワークを実践してみて得られた気づきやふりかえりの論点の中心がプログラムの準備や設計部分に集中した。このように「ファシリテーション能力を身につける」機会については比較的不足していた点が課題であった。

法教育演習 I

□授業の趣旨

法学部が開講している初年次演習科目「プレップセミナー」に、次年度 SA（スチューデント・アシスタント）として授業をサポートする学生を対象とした専門教育科目である。スチューデント・アシスタント（SA）科目として位置づけられており、「法教育演習Ⅱ・Ⅲ」が実際のプレップセミナーでの SA 活動となる。法教育演習 I は、SA 活動に向けた準備を行う科目で、課題解決型のグループワークやリサーチ等を通じて、大学における法学学習の準備を整えるために必要な事柄は何か、学ぶべき内容は何かを理解するとともに、初学者の意欲を高め分かりやすい教え方、初学者と教員の橋渡しとなり得るファシリテータとしてのスキルや教員との協働のあり方を学ぶ。

F 工房は授業の第 13 回～第 15 回を担当し、SA 活動に内包される 2 つのポイントをファシリテーションの視点から学ぶことを目的として授業を行った。2 つのポイントとは、1）プレップセミナーのクラス内に何でも言い合えるリラックスした雰囲気をつくり、学びに専念できる環境を生み出す、2）観察やフィードバックを通して、受講生の有能感を育み、授業に対する意欲向上を支援する、である。なお、上記の目的は、担当教員との事前打合せの際に昨年の課題や今年度の SA 活動の様子を共有した上で決定した。

□概要

日　時　　1 月 8 日（金）、15 日（金）、22 日（金）3 限
場　所　　14 号館 14106 セミナー室
参加者　　受講生 13 名、担当教員 3 名、学生ファシリテータのべ 4 名、F 工房スタッフ 2 名

□授業運営

［第 13 回授業（1/8）］【アイスブレイクを体験・作成する】

オリエンテーション

F 工房の紹介、ファシリテーションの概要、ファシリテータのスキルやマインドの説明後 SA の役割とファシリテーションの関連性について紹介。全体の研修の流れについて説明を行った。第 1 回は、様々なアイスブレイクを体験してもらいながら、実際に SA として 1 回目の授業でどのようなワークを行うかを想像するきっかけとした。

アイスブレイク（サークルコレクション）

担当教員も含めた全員で円になり、身体を動かしながら交流を深めるいくつかのアイスブレイクを実施。通学・通勤時間順で円になり、隣の人とペアで 2 分ほど自己紹介を行う。その後、もう片方の隣の人と同様に自己紹介を行った。円で 1 から順番に数字を言い、3 の付く数字と 3 の倍数の際には拍手を行うゲームを行った。ペアで近くの人と知り合い、円のワークで全体の雰囲気を掴み、段階的に安心感・一体感を築く流れで行った。

アイスブレイク（フリップ自己紹介）

円のまま、ナンバリングを行い、4～5 人グループを作った。A4 用紙を 4 つ折りにし、上から順番に、「冬休みの思い出 NO.1」「名前（ふりがな）」「SA をやろうと思った理由」「これまで法教育演習を受けて、思っていること（感想や今後の意気込み等）」を記入、グ

ループ内で共有を行った。

ミニレクチャー（アイスブレイクの意義）

アイスブレイク体験の感想を聞きながら、アイスブレイクの効果や活用先、アイスブレイクを実施する上でのポイントについて紹介を行った後、質疑応答タイムを設けた。

グループワーク（アイスブレイクを作る）

グループで「初回授業で実施するアイスブレイク」を考えた。グループ分けの方法やコンセプト等を含め意見交換を行った後に、共有した。3 グループうち、1 グループに第 14 回授業で 15 分ほどのアイスブレイク実践を依頼した。

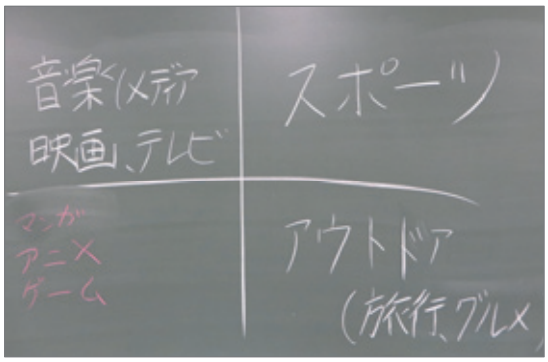
［第 14 回授業（1/15）］【観察とフィードバックを体験する】

アイスブレイクの実践と意見交換

1 グループが第 13 回授業で考えたアイスブレイクを 15 分間運営した。「音楽（メディア）、映画、テレビ」「スポーツ」「漫画、アニメ、ゲーム」「アウトドア（旅行、グルメ）」のカテゴリーを提示し、自分の興味のある所に移動、同じカテゴリーの人と、10 分間自己紹介をしながら、カテゴリーに関する内容も踏まえて様々な話をするアイスブレイクであった。終了後、運営側・参加側のそれぞれが気づいたことや、良かった点・改善点についての意見交換や質疑応答を行った。

【アイスブレイク】

板書説明（カテゴリー）



実施後のフィードバックの様子

ミニレクチャー（観察とフィードバック）

観察やフィードバックについて「自己発見と大学生活」で学生ファシリテータが実際に行っている事例を扱い説明を行った。コンテント（内容）とプロセス（関係性）を分けて観察すること、フィードバックでは、見えたことを「私視点」から返すことを心掛けることをポイントとして紹介した。

観察とフィードバックの体験

3 人組を作り、お題に沿って 2 人が話し合い、1 人が観察をするワークを行った。観察役は、観察シートに、それぞれのメンバーの内容面・関係性の面について気づいた点の記録を行った。3 サイクル回し、観察役を 1 人 1 度体験した。

その後、観察シートを参考にしながら、フィードバックシートに、メンバーへのフィードバックコメントを記入。3 人でお互いの様子についてフィードバックを行った。

［第 15 回授業（1/22）］【SA 活動の実際（ケースワーク）】

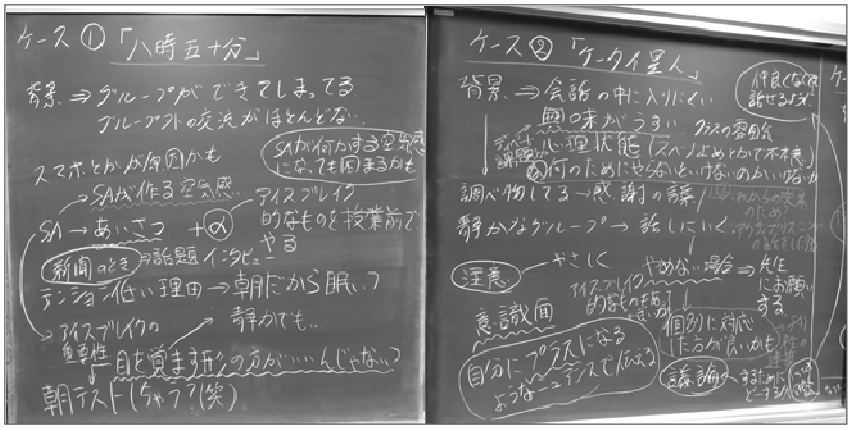
ミニレクチャー（アイスブレイクやフィードバック時のポイント）

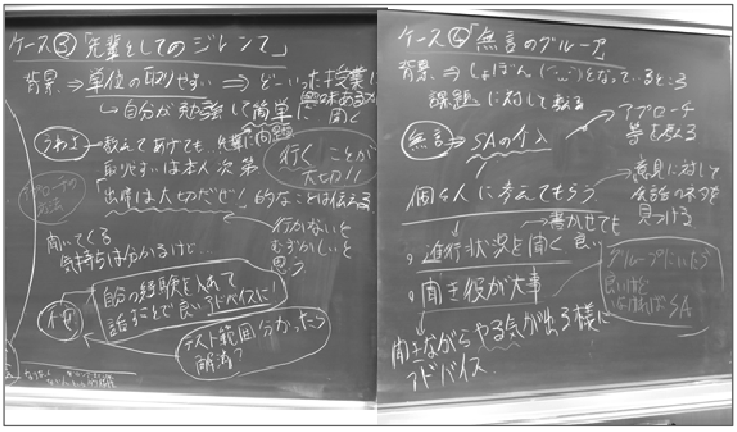
前回のアイスブレイクや観察・フィードバックの振り返りを行った後、ファシリテータとしてアイスブレイクやフィードバックを行う際に、考慮しておきたい人権の話について説明。「人種、民族、国籍、出自、宗教、ジェンダー、セクシュアリティ、障がい」に関する内容を共有した。

ケースワーク「SA としてどう振る舞う？」

SA 活動で実際にあった事例を元に、ケースを 4 つ作成。興味のあるケースを 1 つ選び、同じケースのメンバーでグループを組む。ケースワーク対応検討シートに、個人でケースについて考えられる背景や要因、対応について考えたものを記入し、グループメンバーで意見を共有した。最後にグループとしての対応策を導き、全体共有と質疑応答・意見交換を行った。「①八時五十分（1 限の授業が始まる前、8:50 の教室に漂う緊張した雰囲気をどう和ませることができるか）」、「②ケータイ星人（グループワークの最中に携帯電話を触っている学生にどう対応するか）」、「③先輩としてのディレンマ（仲良くなった受講生に「単位の取りやすい授業は何ですか？」と聞かれた際にどう対応するか）」「④無言のグループ（ディベート準備作業の進捗が滞っているグループをどのようにサポートするか）」の 4 つを用意した。いずれのケースも、実際に SA 活動を経験した学生からヒアリングして考案した。

【ケースに対して考えられた結果（全体共有）】





□成果・課題

研修と実際の活動開始後（アイスブレイク実施、教員や他クラス SA との連携）のイメージを掴んでもらえるようにプログラムを設計した。アイスブレイク、観察・フィードバック、ケースワークそれぞれの項目において、実践やグループでの話し合い、全体での意見交換などを取り入れることで、アクティブに動く機会を多く持つことができた。また、それぞれのプログラムに担当教員や公開授業を見学した教員（第 14 回）、元 SA（第 14、15 回）が入り、一緒に話し合いながら検討することで、より多くの視点を得られ、それぞれの立場が学び合える場となった。勉学面での支援と関係性の支援、そのいずれも担う SA にとって、専門的な内容に関するフィードバックを行う教員、関係性に着目する F 工房、実際に活動を経た SA がいたことは多角的に学ぶことができるという点で有意義であったと考える。本科目における取組みは、今後各学部における初年次教育に SA が取り入れられていく際の実践モデルになると考えられる。

課題として、多様な学生を支援する際に、まだまだ網羅できていない部分が見えたと考えられる。グループワークに入ることが一切できない学生はどうするのか等、そうしたケースについては、引き続き様々な専門分野の人、経験を積んだ人同士で集まり協議をする必要がある。

また、実際に授業が始まってからの SA や教員へのフォローアップ体制等、貢献できる部分についても検討したい。

□アンケート結果

［方　法］最終授業終了後、担当教員を通じて Moodle（e ラーニングシステム）から受講生に Word データを配布。回答生がデータを入力し Moodle を介して提出。

［回答数］12 名（回収率：92%）

■第 13 回「アイスブレイクを体験・作成する」では、アイスブレイクの意義や実践方法などが理解できましたか？

全員が「思う」または「どちらかというと思う」と回答。

■第 14 回「観察とフィードバックを体験する」では、フィードバックの方法とそれに向けた観察の基礎について理解できましたか？

10 名（83.3%）が「思う」または「どちらかというと思う」、2 名（16.7%）が「どちらでもない」と回答。

■第 15 回「SA 活動の実践（ケースワーク）」では、SA活動で起こる具体的な場面とその対処方法についてイメージすることができましたか？

5 名（42%）が「思う」、7 名（58%）が「どちらかというと思う」と回答。

■Ｆ工房が担当した３回の授業は、ＳＡ活動の参考になると思いますか？

11 名（86.6%）が「思う」または「どちらかというと思う」、1 名（8.3%）が「どちらでもない」と回答。

【コメント】

■F工房が担当した3回の授業は、SA活動の参考になると思いますか？

・受講している学生と一体となっているような授業だったので、変な緊張感もなく、リラックスして 3 回にわたる授業に臨めたと思う。そのおかげか、内容はかなり印象的で、今後の SA の活動にも生かされるのではないかと思った。

・12 回目までの SA として必要な知識を身に付けてきたのに対し、実践的な授業だったので実際の SA としての活動におけるリハーサル的な意味で役に立ったので SA 活動の参考になった。

■今回の授業での学びをＳＡ活動以外で活かすとしたら、どのような場面で活かせると思いますか？

・「サポートをする」という観点で見ると、新入生に限らず、困っている人がいたら自分の教えられる範囲で相手から答えを導き出せるサポートが出来るようになるかなと考えました。

・観察とフィードバックに関しては、本当に日常でも使えると思います。むしろ、人と何気なく会話する日常生活の方が、他者を観察し、入り込んだ会話をし、時にはフィードバックすることで充実した人間関係の構築に活かせると思います。

■プログラム全体に対するご意見・ご感想など。

・学生が学生間で起こる問題点や SA ならではの問題を教員を交えて議論できたのでとても身になる内容であった。なので、この経験を SA の活動に生かせるようにしたいと思えた。

■学部初年次科目
入門セミナーA（文化学部）

□授業の趣旨

新入生が学部の環境にスムーズに適応できるようにデザインされた複数クラス開講科目。受講生同士、受講生と教員のあいだに「何を言っても聴いてもらえる」関係をつくる中でアカデミックスキルを学びつつ、文化研究への初歩的なプロジェクトに取り組む。受け身のスタンスをリセットするとともに、学部教育へのモチベーションアップを図る授業である。F工房は、アイスブレイクやワークを通して関係作りの支援を行った。

□概要

日　時　初回授業（池田先生、草野先生、竹内先生）：4月8日（水）、10日（金）
第2回授業（池田先生、草野先生）：4月15日（水）、17日（金）
第3回授業（草野先生）：4月22日（水）
第4回授業（池田先生、草野先生、宮川先生）：4月27日（月）、29日（水）
5月1日（金）※すべて1限

場　所　11号館11401演習室（4月8日）、11402演習室（4月8日、15日、22日、27日）、11302演習室（4月10日、17日、5月1日）、11303演習室（4月27日）

参加者　受講生のべ190名、学生ファシリテータのべ15名、F工房スタッフ2名

□授業運営

［初回授業］

アイスブレイク（1）「サークルコレクション」

全員で一つの円をつくり、円を組み替え自己紹介しながら出来るゲームを複数行った。

アイスブレイク（2）「キーワードコレクション」

ペアワーク。各自、自分のことを表すキーワードを文字や絵で表現する。ペアを組み自己紹介をしながら、お互いのキーワードについて紹介し、お互いのキーワードをリストに記入する。なるべく多くの人と対話することを目標とした。

アイスブレイク（3）「ネームチェーン（名前覚えワーク）」

全員で一つの円をつくり、順番に名前を名乗る。2周目より、「○○さん、○○さんの隣の△△です。」という要領で、クラスメイトの名前を覚えることを目指した。

［第2回授業］

アイスブレイク（1）「サークルコレクション」

参加者全員で円になって実施するアイスブレイクを組み合わせたアクティビティ。隣同士で自己紹介をし合った上で、身体を動かしたり触れ合ったりしながら非言語のコミュニケーションを行う。

アイスブレイク（2）「二画師匠」

参加者を3人一組のグループに分け、「口」の字に二画だけ足して成立する漢字を挙げていく。できる限り多くの漢字を挙げられるようグループ間で競う。

ペアワーク「オススメを語ろう」

自分が人にオススメしたいものや場所について話すペアワーク。話す内容を事前に900文字程度で準備しておき、当日はキーワードのみを書いたA4用紙を見せながら紹介する。一人当たりの持ち時間を3分、1分と変化させたり、聞き手の態度を「無反応」「積極的な反応」など変化させたりすることで、伝える・傾聴といったコミュニケーションのあり方について考える。

［第3回授業］

グループ分けの後、グループ内自己紹介を行い、アイスブレイクとして「4文字の国名クイズ」を実施した。その後、同じグループで情報カードゲーム「匠の里」を実施した。各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布し、全員で課題（問いかけに答えること）クリアを目指した。グループでのふりかえり、全体での分かち合いの時間を持ち、グループ内での自らのふるまいや影響関係について学びを確かめた。

※「匠の里」は草野先生クラスで実施。

［第4回授業］

第3回授業でのグループを解体し、新たなグループを結成。記入用A4用紙と学内案内図を配布し、グループ内で「学内のオススメの場所」を語り合う。その後、大学生活の不安な点を3つ付箋紙に記入して共有。解決方法を考える。教員や学生ファシリテータも話を聞き、地図を見ながら困った時に行く場所を伝える等のアドバイスを行った。グループワークを通して、相手に伝える力・相手の話を聞く力を身に付けると共に、情報を共有し、不安を解消することを目的とした。

※池田先生、宮川先生クラスでは「匠の里」を実施。

□成果・課題

各クラス、教員のニーズに応じて、1回～複数回授業にかかわった。今年度よりコンサルティングシートの記入を教員に依頼し、F工房スタッフや学生ファシリテータとの事前打合せ、事後ふりかえりを行いながら進めることができ、クラスの状況や到達したい目標等をより詳しく共有した上で、授業支援に挑めたと感じる。学生ファシリテータも打合せをふまえ、自らプロットを作成し当日運営を行うことで、より深く授業にコミットできたと考える。

また、今年度よりアイスブレイクに対する受講生の反応を詳しく知るために、各クラスの初回授業においてアンケートを実施した。「アイスブレイクがある場合とない場合で雰囲気に違いはあると思いますか」という質問に、「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した人の割合は約90%であった。この結果から初回授業におけるアイスブレイクの効果を実証できた。また、初回以降、さらにその効果を高めるには、グループ替えを多く行うよりも、しばらくは同じグループでアイスブレイクを行う方がより関係性が深まると考えられる。

学生ファシリテータが教員やF工房と協働しながらワークの設計やサポート、大学生活

に対するアドバイザーとして授業に入り込んでいるこの授業は、各学部が取り組む初年次教育における支援のひとつの実践モデルになると考えられる。引き続き、参加型授業に取り組む教員それぞれに蓄積されているノウハウ、成果や課題を共有する等の連携を図りながら支援に取り組んでいきたい。

【学ファシが作成した運営プロット】

文化学部入門セミナー・アイスブレイク

2015 年 4 月 7 日
学ファシ●●作成

1　サークルコレクション

9：20　サークルコレクション開始

- ✧ アイスブレイクの趣旨説明（30 秒ほどで）
- ✧ 貴重品を身に着けてもらうアナウンスをし、机と椅子を壁側に寄せてもらう。
- ✧ 片づけが済み次第、ファシリテーターを中心とした円を作ってもらう（この際ファシリテーターが円の一員として参加しても良い）

2　「パチン」（サークルコレクション）開始

9:21～　説明含め 5 分

内容：隣の人へ向かって両手を叩いて「パチン」と音を出します。（うまく鳴らなくても OK）自分の前に「パチン」が来たら間髪入れず隣へ渡していく。これを一周させる。

アレンジ案：2 周程したところで今までの向きとは逆に「パチン」する。（ファシリテーターが円に参加している場合）そして、どんどん回して　等のアナウンス。同時に誰が「パチン」の流れを変えても良いことをアナウンス

ファシリテーターが円に参加していない場合、「パチン」を中断させ「パチン」の流れを変える方法をアナウンスし、再開

アドバイス：参加者の様子を【注意深く観察】。特に「パチン」の流れを変える際、一か所だけでずっと流れを変えて、また変えて・・・と同じところで往復する場合がある。その時はファシリテーターが参加者にこちらにも回すことを促す。参加者の様子をみて切り上げる。（大体 1 分程）

3　無言のナベアツ（アイスブレイクの名前は後々変更）

9：25～　説明含め 5 分

内容：円のメンバーで 1～50まで数字を、声をだしてカウントアップしていく。その際、3 の倍数と 3 の付く数字のとき手を叩く。間違えた場合、間違えた次の人から再スタート。　※手を叩く時、声は出さない

例：A さん「1」 B さん「2」 C さん（手を叩く）D さん「4」・・・・・A さん「50」

注意点：3 の倍数は分かりやすいが、3 の付く数字は 13,23,30、31・・・になるのでファシリテーターが良くルールを理解しておく

アドバイス：20 人の人数で行うと 1～50 まで終わる可能性が低いので、5 分程度で切り上げる。

4　キーワードコレクション

9:30～　説明含め 25 分

内容：～自分を表すキーワード～（別紙）に自分を表現するキーワードを書き。それを元に他者と 1 対 1 で自己紹介。その後、キーワードを書いた紙の裏面に相手の名前・出身・相手のキーワードを記入する。これを多くの人と繰り返していく。

アドバイス：自分のキーワードを書く時は（1 文字・英語・熟語・絵 etc…）ただし、長文は控えるように軽めのアナウンス。説明中でファシリテーターが例を示すと効果的。

アレンジ案：1.2 回目のペア組・自己紹介はこちらで開始と終了をアナウンスして（先攻・　後攻 1 分ずつ）、その後ペア換えまでをし、その後自由にワークを促す。

5 ネームチェーン

9:55～　説明含め 20 分

内容：円になり、自分の名前を言い、次の人が 1 番の人の名前を言い「A の隣の B です。」という。それを最後の人まで繋げていく。間違えた場合、間違えた次の人からスタート。

プレップセミナー（法学部）

□授業の趣旨

1 年次の春学期の段階で、法学部で学ぶのに必要な基礎的能力や知識を身につけることを目的とした少人数演習科目。アイスブレイク実施による関係性の構築やグループワークの体験を通して、チームで活動する意義を考えるべくグループ課題を提供した。

□概要

日　時　　4 月 15 日（水）1 限（新先生クラス）
　　4 月 21 日（火）、6 月 9 日（火）1 限（久保先生クラス）
場　所　　4 号館 4E 演習室（4 月 15 日）、4H 演習室（4 月 21 日、6 月 9 日）
参加者　　受講生のべ 69 名、学生ファシリテータのべ 4 名、F 工房スタッフ 2 名

□授業運営

［4 月 15 日］初回授業 ※4 月 8 日休講のため

フリップ自己紹介・キーワードコレクション

A4 用紙をフリップに見立て、「名前」「出身」「法学部で興味ある分野」「今の気分」について記入、ペアを組み自己紹介を行った。相手の名前、自己紹介で話した内容から出てきたキーワードを記入した。クラス全体の雰囲気やメンバーの把握をし、安心感の中で、相手のことを覚えられることを目的とした。

［4 月 21 日］第 3 回授業

アイスブレイク「二画師匠」

グループに分かれ、自己紹介を行った後、「二画師匠」を行った。グループで協力し、「口」に直線二画を足してできる漢字をたくさん挙げる。

情報カードゲーム「匠の里」

4 人～6 人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で課題（問いかけに答えること）クリアを目指した。

情報のインプット（受信）、アウトプット（発信）を意識しながらワークに取り組むことを留意点として示した。

［6 月 9 日］第 9 回授業

グループ分け「ランキングゲーム」（お題：サッカー派か、野球派か）

受講生全員に立ち上がってもらい「野球派／サッカー派」に分かれて一列に並んでもらう。その後順番に番号をふっていき、4～5 人グループに分かれる。この後行う「9 人のポジション」を実施するにあたって、野球のポジションに関する知識が全くない受講生のみが固まってしまうことを防いだ。

アイスブレイク「共通点グランドスラム」

グループ内の一体感を高めるため、5 分以内で「グループの全員に共通すること」を 1 つ挙げてもらう。このとき、「人間である」「京都産業大学生である」「性別」「プレップ

セミナーを受講している」といった共通点は挙げないように注意してもらう。

情報カードゲーム「9人のポジション」

4〜5人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で課題（ポジションの把握）クリアを目指した。

□成果・課題

初回授業では、アイスブレイクに対する受講生の反応を詳しく知るために、アンケートを実施した。「アイスブレイクがある場合とない場合で雰囲気に違いはあると思いますか」という質問に、全員が「そう思う」または「どちらかというとそう思う」と回答した。その理由について、「自分から話しかけるのは難しいのでこういう機会があるのはいいと思う」、「話したらその場の雰囲気がわかるから」、「人見知りの人にとっては楽な気分になる」といった記述が多数挙げられた。初回授業におけるアイスブレイクが非常に有効であることが受講生の実感としてうかがえる。

現在、学生ファシリテータとF工房職員で授業に参画している。学生ファシリテータは事前打合せ・事後ふりかえりへの参画、当日のアイスブレイクの設計・運営、観察役を担う等、その都度臨機応変に活躍している。今後、初回授業支援のニーズが増えていくと予想されるが、その際に、学生ファシリテータがF工房の紹介やF工房スタッフが担っていたワークの進行を担当する等、学生ファシリテータがひとり立ちできるよう育成することが、F工房スタッフのミッションであると考えられる。

情報カードゲームについて、ふりかえり用紙には「グループメンバーの声が小さく聞き取れないことを伝えてみたが、うまく伝わらず悔しい思いをした」といった記述が見られ、受講生が発信と受信を意識している様子や、自他と向き合っている様子が見られた。また、授業後のふりかえりの席で、学生ファシリテータの発言に対して教員がフィードバックする場面があった。学生ファシリテータ育成という視点から、ふりかえりにおいては授業運営上の改善点だけでなく彼ら自身の感情や気付きの共有も重要だといえる。情報カードゲーム「9 人のポジション」の特徴として類似の「匠の里」よりも論理的思考力が求められる。過去の実施実績からも正答率が高くないため、苦戦して集中力が落ちているグループがある場合はヒントを適宜出してもよいと思われる。

ファンダメンタル・セミナー（法学部：耳野先生）
～みんなで考えよう、現代社会の重要問題～

□授業の趣旨

本科目は、1 年次春学期開講の「プレップセミナー」、「法律学入門」から、より専門的な科目への橋渡しを行う「アクティブラーニング科目」として位置づけられている。その内容は、受講生と教員の意見交換、受講生相互のディスカッション、レポート課題の提出等、より能動的な学習を重視したものである。また、複数の教員が担当し、それぞれテーマを設定している。教員によって授業内容が多様な科目である。

耳野先生クラスでは、学生各自がグループを作り、社会に生起する時事的問題を取り上げ、プレゼンテーションおよびグループワークの実施を行う。具体的な内容としては、①学生が基本的な論点を報告し（プレゼンテーション）、②クラスをグループに分け、各グループでその論点について議論し（ディスカッション、グループワーク）、③その内容をクラス全体で共有する（シェア、ふりかえり）、を行う。

本科目の到達目標は、各学生が与えられた問題について、「自分で資料を調べることができる」、「プレゼンテーションをおこなうことができる」、「基本的なワークショップを自分で設計し、運営することができる」である。

自分たちの関心あるテーマを基に、「発表」+「話し合いの場づくり」を実地に経験することで、専門での学修の基礎、さらには社会人としての基礎的なスキルを身に付けることを目的としている。

第 1 パート（第 1 回～5 回）では 3～4 人グループを作り「ディベートのすすめ（著：望月和彦）」の目次より関心のあるテーマを選び、15 分ほどのプレゼンテーションが行われた。

F 工房は、主に第 2 パート（第 6 回～8 回）を担当し、ワークショップ設計・運営のための基礎的なトレーニングを行った。事前準備では、教員と共に授業内容に合わせたワークショップの型および運営マニュアル作りを行った。

研修の目的は、科目の到達目標の 1 つであるワークショップ運営スキルを受講生が身に付け、第 3 パート（第 9～15 回）において、各グループがワークショップの運営（グループ分け、アイスブレイク、プレゼンテーション、ディスカッションのファシリテート、全体共有、ふりかえり）ができるようになることである。

□概要

日　時　　11 月 6 日（金）、13 日（金）、20 日（金）、12 月 4 日（金）1 限
場　所　　4 号館 4F 演習室
参加者　　受講生 25 名、学生ファシリテータのべ 2 名、F 工房スタッフ 2 名

□授業運営

［第 6 回授業（11/6）］【ワークショップの体験と理解、第 1 パート（第 1 回～5 回）のふりかえり】

<u>オリエンテーション</u>

F 工房とスタッフの紹介、全 3 回の研修全体像、本日の進め方とルールの説明。

全体アイスブレイク「サークルコレクション」、グループ分け体験

学生ファシリテータの運営のもと、通学時間順に並び、全員で行うゲーム「パチン」、「キャッチ」を実施した。その後、番号を振り5グループに分かれた。

グループ内アイスブレイク「記者会見」

グループメンバー1人に対して、メンバー（記者）1人ずつ1つ質問をする。回答後次の記者に移る。全員が質問を終えたら、他のメンバーが質問を受ける側になる。
質問を考え、答えるプロセスを通じてお互いを知ることが目的である。

ワークショップに関するレクチャー

ワークショップの概要（意味・特徴）、多様な事例、運営形式・方法、ワークショップがある時とない時の違い等についてレクチャーを行った。

ワークショップ（ディスカッション+全体共有）の体験

ワークショップについて「わかったこと」「疑問に思ったこと、モヤっとしていること」「身近でワークショップを使うならどのような場面で使うか」について、各自A4用紙に記入し、グループで共有。その後、各グループが発表、運営側よりフィードバックを行った。ミニゲーム「マルの上にマル」を実施し、同じ言葉でもそれぞれによって捉え方が違うことを体験した。

ワークショップとファシリテーションの繋がり

ワークショップにおけるファシリテータの存在と役割についてのレクチャー、場のデザインの概要について紹介した。

グループ作業（第1パート：プレゼンテーションのふりかえり）

第1パートのグループになり、プレゼンテーションのふりかえりを行い、第9回授業で行うミニワークショップの運営にむけて内容の再検討を行った。

［第7回授業（11/13）］【ファシリテータの役割について理解する＆第9回運営準備】

オリエンテーション

前回授業のふりかえり、研修の到達目標の再確認を行った。

レクチャー（ファシリテーションのスキルや考え方）

ファシリテーションの定義を紹介し、身近にいる人からファシリテータを連想してもらうようレクチャーを行った。

その後、2つのTV番組を題材に、司会者の振る舞いや、場の様子、参加者の様子をファシリテーションの視点から見て、気づいたことについてグループで考え、発表を行った。

第8回授業ミニワークショップ運営準備（自分のグループが行った発表の検証）

第1パートのグループでミニワークショップの準備を行った。第1パートで行ったプレゼンテーションが、実際に参加者がディスカッションを行う際、どのように話し合いに反映されるのかを検証した。プレゼンテーション内容から、話し合いの材料になるものをディスカッションシートに書き出し、プレゼンテーションで提供された情報の過不足について把握するなど次回授業に向けて修正を行った。加えて、役割分担（プレゼンテーション、ファシリテータ役、観察者役、参加者役）も行った。

ディスカッションシート

（　　班／名前　　／ワークメンバー　　）

個人ワーク

賛成／理由	反対／理由
自分の考え＆理由（賛成意見・反対意見それぞれ納得できる部分とその理由。それを踏まえて自分はどう考えるか）	
テーマに対する疑問（発表班に聞いてみたいこと等）	

グループディスカッション

個人ワークの共有・ディスカッション グループディスカッション内容、合意できた部分できなかった部分、その理由等）
発表にむけて：グループとしての結論と理由、　その他（出た話、発表班に聞いてみたいこと等）

[第8回授業（11/20)]【ミニワークショップの実践】

ふりかえり

ファシリテータの役割について、第7回授業での意見交換をふまえて確認を行った。

ミニワークショップの実践

第1パートのグループメンバーでミニワークショップの実践を行った。

［第 9 回授業（12/4）【第 3 パートの説明】］

ワークショップの手引き（「ワークショップ初心者キット」）の説明（F 工房より）

第 3 パートでは、新たに 5 人グループを結成した。アイスブレイク、グループ分け、プレゼンテーション、ディスカッションにおけるファシリテータ、全体共有、ふりかえりという一連の流れのワークショップを 60 分ほどで運営する。

教員と F 工房スタッフとで作成した運営のためのワークショップの手引き「ワークショップ初心者キット」を配布し、それを元に各グループが運営を行った。

□成果・課題

ワークショップについて体験や実践を交えて行ったことで、イメージを掴んだうえで運営ができた。特に、新たな取組として行った TV 番組や番組司会者をファシリテータの視点から観察し、気づいた点を意見交換するプログラムでは、それぞれに多様な気付きがあり実際のファシリテータとしてのイメージを掴んでもらいやすく手ごたえを感じた。

第 3 パートでは、「ワークショップ初心者キット」を参考に、それぞれがアイスブレイクやグループファシリテータ等の役割を分担し、持ち味をいかしながら運営していた。第 2 パートの研修をふまえた第 3 パートでの実際の運営で、主体者としての意識が高まっていることを感じた。「教職員が授業をするのではなく、自分が運営するのだ」という当事者意識や緊張感の中で、難しさを実感しながらも運営に対する学びが深まったと考える。研修がアウトプットとセットである意義を改めて実感した。また、ディスカッションの際もディスカッションシートをもとに個々が自分の考えをまとめてから、意見交換を行う型ができていたように見えた。

一方で、研修の内容について、ワークショップやファシリテーションについての説明の分量や「ワークショップ初心者キット」の情報量が多くどこがポイントかが不明という指摘があった。ワークショップ初心者の学びの到達点に合わせた、情報提供の量や体験の内容を検討することは、学内にファシリテーションを普及する上でも重要な観点であると考え、今後再考する必要がある。

また、実際に第 3 パートでの運営の際に、ディスカッションの意見交換（調べたテーマに対する賛否の議論）が運営班の意見に左右されやすくなっていた。運営側のテーマに対する賛否それぞれの情報の提供バランス、参加者側のテーマに対する多様な視点からの考察・意見の発信が重要であり、そうした実感を得られるようなワークを研修やキットに組み込むことも今後検討したい。

【ワークショップ初心者キットの一部】

むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

ワークショップ 初心者キット 2015 ～学び編～

ワークショップの学びと実践！

～この冊子について～

■ワークショップ（プレゼンテーションとディスカッションを組み合わせた形）を設計、運営するために必要な段取りやポイントを記載しています。

■別冊「実践編」のワークシートと組み合わせて、ワークショップ作りの一つの参考資料となれば幸いです。

■台本や記入例がありますが、あくまでも１つの例です。どんどん各自で創意工夫・アレンジしてオリジナルなものを考えてみてください。

クリエイティブ楽しんで参りましょう♪

From.Asayo Otani@F 工房

コーオプ教育研究開発センター　F 工房 大谷麻予　鈴木陵

2015/12/04

氏名：

Facilitator Mind

【目次】

1．ワークショップとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
（1）ワークショップ概要　P3
（2）この冊子におけるワークショップ　P4
（3）ワークショップで大事なこと　P4
（4）ワークショップにおけるファシリテータの存在　P5
★コラム★　日本語になりにくいワークショップ　P3
★コラム★　あちこちで開かれているワークショップ　P4　（実践編 P13）
2．ワークショップの方法－事前準備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P6　（実践編 P2.3）
（1）プレゼンテーション準備のあれこれ　P6　（実践編 P13）
①テーマ選定の基準
②プレゼンの作り方
③プレゼン内容に含まれていると、よりいいと思われる内容（参加者の理解を促進するために）
（2）分担する　P6
（3）タイムテーブルをつくる　P7～9
（4）運営本番にむけて作業分担シート　P10
3．ワークショップの方法－当日の運営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P11
（1）プレゼンテーション　P11
①プレゼンの基本原則
②口頭発表のやり方
③グループ協働作業の留意点
（2）ディスカッション　P11～15
①ディスカッションとは　P11　（実践編 P5.9.11.13）
②ディスカッションで大切なこと　P11.12　（実践編 P5.9.11.13）
③ディスカッションの場にいる人の役割　P12
④グループファシリテータ 3 つのスキル　P12～15
（ア）聞く、訊（き）く（アクティブリスニング）　P12.13
（イ）視点の提供　P14
（ウ）観察　P15　（実践編 P7）
★コラム★TV 番組司会者をファシリテータの側面から見てみると…　P15
4．ワークショップの方法－ふりかえり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P16　（実践編 P9.11）

5．当日に向けての最終チェック！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P16

6．参考文献・・P17

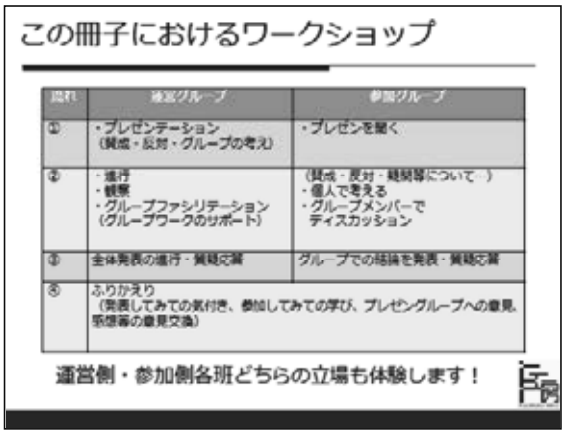
7．おわりに・・P17

（2）この冊子におけるワークショップ

「プレゼン（話題提供）＋ディスカッション＋全体共有＋ふりかえり」の流れが
ワークショップです。

【目的】問いに対して、自分なりに考え、ディスカッションをし、再度自分の考えを深める

【目標】まじめな話をまじめに、率直に話し合う
お互いを尊重しながら、話し合える雰囲気をつくる＆体験する



流れ	運営グループ	参加グループ
①	・プレゼンテーション（賛成・反対・グループの考え）	・プレゼンを聞く
②	・進行 ・観察 ・グループファシリテーション（グループワークのサポート）	（賛成・反対・疑問等について…） ・個人で考える ・グループメンバーでディスカッション
③	全体発表の進行・質疑応答	グループでの結論を発表・質疑応答
④	ふりかえり（発表してみての気付き、参加してみての学び、プレゼングループへの意見、感想等の意見交換）	

★コラム★　あちこちで開かれているワークショップ

ワークショップはあちこちで開かれてます！
「ワークショップ　芸術」「ワークショップ京都市北区」「ワークショップ　やり方」「ワークショップ　大学」「ワークショップ　企業」「ワークショップ　NPO」などなど、ワークショップと、自分の興味がある言葉を組み合わせて調べてみたり、参加してみましょう♪

（3）ワークショップで大事なこと：ファシリテータ、参加者それぞれが参加する姿勢をもつ

（実践編 P13）

・関心をもっ**てみる**（話題について、自分の身近なことと繋がるか想像してみたり）
・考え**てみる**（話題についての疑問や思ったことを考える）
・聴い**てみる**（ほかの人の意見を聞いてみる）
・訊い**てみる**（疑問に思った事を質問してみる）
・言っ**てみる**（自分の考えも言ってみる、相手の意見について思ったことを言ってみる）

普段の自分だったらしないかもしれないことを、「～してみる」＝勇気＝自分の殻を破るとも言えるかもしれない。**初めは意図的にやってみる→自分に自然になじむ！**例）英会話
→新たな自分発見！人とのかかわりの中での視野の広がり！もう一歩考えるきっかけを得られたり…！

■その他
アイスブレイクの実施（初回授業等）

《イタリア語エキスパートⅠ（共通語学）》

□授業の趣旨

共通教育科目の語学授業で、他の語学授業とは違い、週に4コマ（他の「楽しく学ぶ…」は週に2コマ）同一メンバーにて開講されるのが特徴である。通年科目。

□概要

日　時　　4月7日（火）4限
場　所　　12号館12521演習室
参加者　　受講生25名、学生ファシリテータ4名、F工房スタッフ2名

□授業運営

初回授業のアイスブレイクとして、F工房定番の「サークルコレクション」と「Common! Everybody!!」をイタリア語に改良した「Ciao a tutti !（チャオ・ア・トゥッティ）」を実施。

アイスブレイク（1）「第六感バースデーライン」

言葉やジェスチャーを使わないよう指示し、お互いの「印象」だけを頼りに円形に並ぶ。

アイスブレイク（2）「サークル・コレクション」

参加者全員で円になって実施するアイスブレイクを組み合わせたアクティビティ。隣同士で自己紹介をし合った上で、身体を動かしたり触れ合ったりしながら非言語のコミュニケーションを行う。

グループワーク「共通点探しゲーム【Ciao a tutti !】」

お互いのことを知るために、ペアで話し合いながら共通点を見つけるゲーム。共通点が見つかるごとにペアを替え、より多くの人と自己紹介することを目指す。本ワークは担当教員との協働によって2011年に考案されたものであり、毎年この授業で使用している。

同一内容のアクティビティ「Common! Everybody!!」をアレンジしており、ペア成立・解散時のあいさつをイタリア語で行う工夫を取り入れ、イタリア語への関心を高める効果も期待している。

□成果・課題

昨年度まではプログラム運営をF工房スタッフが担っていたが、今年度は当日のプログラム運営の中心を学生ファシリテータへ移行した。その結果、担当教員からは「受講生にとって身近な感じがしてよかった」とのフィードバックをいただいた。なお、全体的に受講生同士が積極的に関わり合って質問し合う様子が見られた。

また、事前打ち合わせにおいて担当教員より「Ciao a tutti !」のワークシートがあるおかげで受講生の顔と人柄が一致するようになったという声があった。初回に実施したアイスブレイクがその授業回に留まらず、以後の授業運営によい影響を与えていることを確認することができた。

4）課外活動の支援
第37回クラブリーダー研修会

□テーマ・趣旨

本学志学会執行委員会の学生からの依頼。例年に引き続き、同委員会が毎年開催している全クラブのリーダーを対象とした研修会をワークショップ形式にアレンジしたいとの要望を受け、F 工房は当日のプログラムデザインを担当学生と一緒に行った他、当日にワークショップの運営を担当する同委員会の学生を対象としたファシリテーション研修を実施。なお、当日のプログラムは計 4 回の打合せを行ってデザインした。

□概要

［志学会執行委員会メンバーへのファシリテーション研修］

日　時　　2 月 12 日（金）17:30〜19:00
場　所　　4 号館 4H 演習室
参加者　　11 名、F 工房スタッフ 2 名

□内容

オリエンテーション

F 工房についてと本日の趣旨を説明。

当日のワーク説明

当日のプログラムと進行方法について担当学生より説明。

ワークの進め方について

当日実施する「フリップ自己紹介」「ワールドカフェ」のワークについて体験し、そのルールを把握するとともに、進行する際に気を付けたいことについて、グループワークを取り入れながら共有する。

□成果・課題

昨年のプログラムをもとにしながら、各プログラムのタイミング、当日の実施テーマや、グループ分け等のアレンジを行った。昨年も研修に参加した学生がいたので、その場でフリップ自己紹介のレクチャーをお願いすることもできた。志学会のメンバーは運営の仕方も、臨機応変なアレンジや対応も慣れている。ゆえに、次年度は、志学会のメンバーがメンバーに向けて事前研修ができるような形で支援を行いたい。依頼者自身が研修を実施できるようにサポートすることが、今後の F 工房が果たし行く役割として重要であると考える。

5）学外での発表・講演

■学会

《日本教育工学会 第31回全国大会》

□テーマ・趣旨

日本教育工学会は、1984年に設立された。教育工学は、人文社会系と理工系、ならびに人間に関する学問分野を融合した学際的な学問で、研究対象は時代と共に変化し、情報化進展の波に乗って発展している領域である。

学会2日目の一般研究発表において、今年度、F工房が作成した「アクティブラーニング・パッケージ冊子」の有効性について発表する目的で学会に参加した。

□概要

日　時　　9月21日（月）-23日（水）（21日：13:00-16:45、22日：9:20-17:00、23日：9:00-16:40）
場　所　　電気通信大学（東京都調布市）
参加者　　F工房スタッフ2名（教員、コーディネータ）

□内容

発表テーマは「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージの有効性について」である。15分の発表時間の中で、F工房の設立経緯を紹介した後、アクティブラーニング・パッケージの有効性と課題を検証すべく行った予備調査を分析した結果について発表し、後に質疑応答が行われた。

以下では、報告内容の概要を紹介する。報告スライドは巻末資料（p.90-91）に掲載。

パッケージ作成、予備調査の経緯

F工房では、ファシリテーション理論をふまえ、フラットな関係に基づいた小集団学習支援の方法を開拓してきた。本学では、学習者と同じ目線に立ちつつ学習活動を支援するスタンスを「ファシリテータマインド」と呼び、このマインドを持つ学生ファシリテータを育成し、学内の正課内・正課外の学習の場において学習支援を行ってきた。

近年、アクティブラーニング導入をめぐる議論が高まるなか、F工房がこれまで蓄積してきたノウハウを、アクティブラーニング導入への転用可能性が検討されるに至った。今年度、ノウハウをパッケージ化したものを作成し、併せて複数の教員にインタビューを行い、冊子の有効性を調査した。

パッケージの内容

本学におけるこれまでの実践例を整理し、モデル化したものを提示した。項目は、1）語学等初回授業、2）初年次ゼミ授業・専門ゼミ授業、3）講義授業（小規模～大規模）、4）学部別入学前・後オリエンテーション、5）課外活動、6）ツール紹介の6つで構成した。

予備調査

F工房とまだ連携はしていないがアクティブラーニングをすでに実施している、もし

くは関心の高いことが期待される教員を全学部から1名ずつ、計8名選び、アクティブラーニングを推進するうえでのパッケージ案の有効性についてコメントを収集した。コメントの収集は2段階に分け、まず質問シートでアクティブラーニング導入への意思、パッケージの有効性について尋ねた。次に、質問シートの回答をふまえつつヒアリングを行い、ファシリテーションの有効性についてさらに詳しい見解を尋ねた。

結果

8名中6名の教員から、パッケージ案を参考にしつつ担当授業へのファシリテーションの導入を検討したいと表明があり（残り2名は未回答）、アクティブラーニング導入に関心を持つ教員にパッケージ案が訴求力のあることが示唆された。なお、1名の教員より発達障がいを持つ学生の参加を想定したパッケージ策定の提案があった。

考察

本パッケージの作成とその有効性をめぐる予備調査を通じて、アクティブラーニングを実践する技法としてファシリテーションが有効であるとみなされていることが明らかになった。また、ヒアリングの中で、各教員がそれぞれの現場で様々な工夫を行いながら授業を展開していることを聞くことができ、多くのノウハウや授業設計の視点について学ぶ機会となった。

今後は、それらを踏まえ、アクティブラーニングにおけるファシリテーションの転用可能性をより実証的に検討すると共に、本パッケージが表層的なノウハウの転用ではなく、ファシリテータマインドに基づく実践方法として転用されるに至っているのか否か、またマインドの普及を確実にするためには、パッケージ化においてどのような更なる工夫が必要となるのかについて検討していく。

□成果・課題

「アクティブラーニング導入のきっかけは何か」などの質問および「アクティブラーニング導入に抵抗する人も出てくる中で、その理由が明らかになればよい」などのアドバイスがあった。また、多くの参加者から教育工学の視点でのフィードバックをもらうことができ、大学を飛び出し、別の視点からF工房の活動を見る重要性、学会参加の意義を感じた。

引き続き助言をもとに、パッケージの改善と実用性の向上を目指したい。

■他大学

《中部大学》
2015年度 キャリア教育ファシリテーション研修

□テーマ・趣旨

中部大学で複数クラス開講されているキャリア教育科目「自己開拓」を担当する教員への研修の依頼。「自己開拓」科目は、グループワークを中心とした授業で、学生同士のかかわりの中で学び合う形態をとっている。

教員は、専門的な知識や技術を伝授するということではなく、課題の進行をサポートし、学生を基本的には見守るスタンスを貫き、学生たち自らの気付きを促す役割を担っている。

このファシリテータとしての役割についての研修は、「自己開拓」の教材を開発した企業のもとで、定期的に研修を行ってきた。その後は、教員同士の相互研修という形態で実施している。今回は、外部からの知見を得るという目的で、依頼をいただいた。本学のキャリア科目での取り組みについて紹介した後、グループワークを通じて、意見交換を行った。

□概要

日　時　　3 月 10 日（木）13:30-16:30
場　所　　中部大学（愛知県春日井市）
参加者　　11 名、本学学生ファシリテータ 1 名、F 工房スタッフ 2 名

□内容

アイスブレイク

フリップ自己紹介を行った。「所属」「名前」「今年の漢字一字」「研修への期待」について記入し、ペアで自己紹介をした。

事例報告

F 工房、自己発見と大学生活、キャリア・Re-デザイン、学生ファシリテータについて、背景や取り組み内容、ファシリテータとしてのかかわり、現場における課題について紹介した後、F 工房スタッフ、学生ファシリテータそれぞれから授業現場での体験を報告した。授業については、主に、キャリア・Re-デザインの内容や、学生の変化について紹介した。

質疑応答・意見交換、ケースワーク

報告内容についての質疑応答であった。キャリア・Re-デザイン受講による留年防止の効果、グループワークに馴染めない学生の対応、成績の評価の配分、学生ファシリテータ気集の内容等について意見交換を行った。後に、授業における 4 つの事例について紹介し、ファシリテータとしてどう対応するかについ
意見交換を行った。

□成果・課題

規模や立地条件、学生の偏差値、授業におけるなど、類似点が多く、事例を通じてお互いに知見の交換をすることができた。F 工房スタッフ、学生ファシリテータ、複数の視点があることでより幅広い意見交換ができた。今後も相互に学び合っていきたいと考える。

■その他

《大学コンソーシアム京都》
2015年度 第13回SDフォーラム 分科会F

□テーマ・趣旨

分科会 F「教員・研究者との協働」に報告者として登壇。フォーラム全体のテーマは「多様な繋がりを育む大学職員」で、学内外の様々な人々とのコラボレーションで成り立つ大学職員が担う業務について、立場の異なる多様な人たちとどのように「コラボ」し、職場の活性化や大学における学術研究や組織の発展、学生の成長、地域の活性化等の課題へどう繋げていくかについて考える会であった。

担当した分科会では、「アクティブラーニング型教育方法導入に伴う職員の役割拡大化の中で～職員による学生同士の関係性構築に重点をおいた提案・支援活動。授業・催事支援、学生ファシリテータ育成を担う職員と、教員の協働について実践報告～」というテーマで、F 工房の活動報告と、授業での実践内容の体験を交えながらワークショップを行った。

□概要

日　時　　10 月 18 日（日）13:00-16:00
場　所　　キャンパスプラザ京都（京都市下京区）
参加者　　30 名（大学関係者）

□内容

立場が多様な参加者同士の交流も兼ねて、ペアで自己紹介を数回行い、5～6 人グループを作り、取組み報告を行った後にディスカッション、各自質問を考えていただいた。

報告では、F 工房設立の経緯・F 工房スタッフの日常業務を紹介後、授業や催事における教員との協働のスタイル、成果・課題について報告を行った。質疑応答後、「この指とまれ分科会」を実施した。ここでは、報告やディスカッションを踏まえ、「今、話し合いたいこと」を各自で考え、類似したテーマの人同士でグループを作りディスカッションを行った。「ラーニングコモンズとアクティブラーニングの関係」、「各大学の取組みの共有」、「学生がやる気になるような取組みについて」、「分かり合うにはどうしたらいいか」等、多様なディスカッションが行われた。

□成果・課題

参加者の教員とのかかわり方は、研究費等の手続きに関する事務担当、キャリア教育科目や会議のサポート、地域コーディネートなど様々であった。グループワークを交えた報告会によって、繋がりを構築しながらディスカッションを深める機会となった。F 工房の活動報告内容については、教職員の協働に付随し、学生ファシリテータ活動に関する報告も行ったため内容の幅が広くなり、落としどころが曖昧になってしまった節がある。質問や意見も多様なものが寄せられ、大きな学びの機会をいただいた。参加者のニーズに応えられる報告やグループワークであったか振り返る余地があると共に、F 工房の体制（職員・学生の育成）等の質問に引き続き向き合い、今後の F 工房活動の参考とする。

《大学コンソーシアム京都》
SDワークショップ 2015「メンタリング・ファシリテーティングの基本と体験トレーニング」

□テーマ・趣旨

大学コンソーシアム京都主催の「SD ワークショップ 2015【第 2 回】メンタリング・ファシリテーティングの基本と体験トレーニング」に話題提供者として参加。入職後 5 年～10 年程度の大学事務職員がメンタリングとファシリテーションの基本を学び日常業務に活かすことが目的であり、他大学の職員がメンタリングを、F 工房スタッフの鈴木がファシリテーションを進行した。

□概要

日　時　　12 月 5 日（土）13:00-17:00
場　所　　キャンパスプラザ京都（京都市下京区）
参加者　　他大学職員 10 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

ファシリテーションに関するミニレクチャー

ファシリテーションの語源や定義、一般的な活用場面などを紹介した後、本学における実践例を紹介した。

ファシリテーション実習とふりかえり

参加者が 3 グループに分かれ、グループファシリテーションを実践した。「後輩・新入社員を指導したり相談を受けた場面」「職員同士の業務ミーティング」などの場面で困ったことやうまくいった事例などについて話し合い、参加者全員が約 10 分ずつファシリテータ役を担った。

ふりかえり

「実習を終えて感じたこと」「印象に残っているファシリテータの発言、行動」「印象に残っているメンバーの発言、行動」の 3 つの観点でふりかえりを実施した。コメントの書かれた付箋紙を A3 用紙に貼り付けることで、フィードバックを一覧できるようにした。

まとめ

参加者のグループワークの様子やふりかえりでのコメント等にフィードバックをおこなった。また、一般的な話し合いの展開と言われる「共有→発散→混沌→収束」の 4 つの段階のうち、今回の 10 分間の実践で扱った部分は「共有」「発散」であること、場面に応じて必要なファシリテーションの要素は異なることを補足したうえで、まとめをおこなった。

□成果・課題

参加者アンケートには「体験を通して自分自身をふりかえることができた」というコメントが見られた。このことから、短時間とはいえ「ファシリテーションの基本を体験」し、自身へのフィードバックを受ける機会は提供できたといえる。一方で「フラットな関係性を大切にする」といった「マインド」の部分は十分に盛り込めていたとはいえず、今後の研修プログラム設計、特に小講義の内容について検討していきたい。

《京滋地区私立大学教職員組合連合》
第3回「学生と社会を変える大学教育フォーラム」

□テーマ・趣旨

京滋私大教連では、大学教育の職業的意義に関する社会的認知の拡大や学生が学び成長する大学教育、卒業生が働き成長する職業環境をいかに実現していくのか、自らの力で社会を変えていこうとする大学生の輩出に向けた大学教育の実践について議論と交流を深める機会を設けてきた。

全体テーマは「学生と社会を変える大学教育の実践交流～主体的な学びの確立を通した学生の成長～」で、大学で社会を変えられるという体験の場を学生が持てるかどうかが改めて問われる中で、その実現に向けた大学教育の実践について考えることを目的に開催された。

F 工房スタッフは「ファシリテーションの活用による学生の主体的な学びの確立～『教わる学習』から『学び合う学習』へ～」をテーマにこれまでの活動実践について発表した。

□概要

日　時　　12 月 19 日（土）13:30-17:00
場　所　　龍谷大学 深草キャンパス（京都市伏見区）
参加者　　20 名（大学教員、大学職員、学生、組合職員）、F 工房スタッフ 2 名（教員、コーディネータ）

□内容

<u>基調報告・話題提供</u>

F 工房設立の経緯、コンセプト、活動の変遷（キャリア教育科目から、学部授業や催事、課外活動支援への展開）、学生ファシリテータ活動について紹介した。

話題提供では、立命館大学理工学部教員より「『物理駆け込み寺～智慧が循環し学生が化ける場所～』の実践」、龍谷大学社会学部教員より「ゼミ教育を通した主体的な学びの確立と学生の成長」というテーマで報告がなされた。

<u>ディスカッション</u>

・教える側、教えられる側ではなく「同志」としてコラボレーションし、共に学ぶ市民的なかかわりを経験することが、主体的な学びには欠かせない。
・教員が作った学びの枠組みと、学生の実感にギャップがある。学ばせるための技法ばかりが先行していて、目の前の学生と向き合うことが不足している。
・教員同士のディスカッションは、学生に「多様な意見があっていい、表明し合っていい」という学びをもたらし、学生自身の行動の変容（主体的学び、意思表明）に繋がる。授業において教員 1 名で実践する方法を考える余地がある。

□成果・課題

学生にも開かれた場で、実際に学生が参加し率直に意見交換できたこと、各立場の考えを知ることができたことが最大の成果であった。内容については、提供する学びの枠組みと学生が実感するギャップについて、F 工房活動を展開する中で重点的に検討したい。

6）学外への協力

《NHK「学校再発見バラエティーあほやねんすきやねん」番組出演》

□テーマ・趣旨

NHK 大阪放送局では、2008 年 4 月から若者をターゲットにした情報バラエティー番組「あほやねん！すきやねん！」が放送されてきた。2015 年 4 月より番組名を「学校再発見バラエティー あほやねんすきやねん」と一新し、小学校から大学までの学校の素晴らしさを再発見するとともに、学校で頑張る子どもたちを応援する番組へとなった。

今回の依頼は、番組内の「近藤夏子のいちにち転校生」というコーナーで、小学生が「授業中に積極的に手を挙げければいけないのか？」という問題について話し合う企画の中で、

「ファシリテータさんの力を借りれば、小学生が円滑に話し合いを進められるのでは？」という仮説より出演してコメントをするというものであった。F 工房スタッフ 1 名が番組スタッフと事前に打合せを行い、当日に臨んだ。

□概要

日　時　　6 月 13 日（土）10:50-12:00
場　所　　NHK 大阪放送局（大阪市中央区）

□内容

事前ワークショップ

放送前に、出演する小学校の 1 クラスの生徒約 30 名とワークショップ（ホワイトボードミーティング）を行った。5〜6 人グループに分かれてもらい、「授業中に手を挙げられない理由」についてそれぞれ思い思いに話してもらった。

放送時間

もともとはコメントをする予定ではあったが、急遽、観覧席に控えた生徒に「手を挙げにくい理由について」話を振ることにした。

□成果・課題

放送時間は 2、3 分と、とても短い時間ではあったが、授業中に手を挙げられない理由について生徒たちから直接意見を発言してもらうことができた。「間違えたら恥ずかしい」「批判される」等、普段生徒が感じている懸念についての表明があった。事前ワークショップでありのままに出ていた声が TV を通してお茶の間に伝えられたことが良かった。子どもは大人を見ている。大人の振る舞いや価値観がそのまま子どもの懸念となりうる。ゆえに、大人の振る舞いが大事である。話しやすい環境・雰囲気は能動的に作り出すものである。先生や親を含めた周りの大人が普段より、上から目線ではない、話しやすい雰囲気を子どもに対して、また、大人同士の間で作ることが、生徒、生徒同士の中でも懸念を減らすことに繋がると考える。

《京都市未来まちづくり100人委員会》

□テーマ・趣旨

特定非営利活動法人きょうと NPO センターからの依頼により、同法人が運営本部を担う「京都市未来まちづくり100人委員会」のグループファシリテータとして参画した。京都市が主催する同委員会は、18歳から81歳までの市民が集い、きょうとのまちづくりについて議論しその結果を自らの実践を通じて社会に向けて発信する機会である。

総勢117名の市民が15個のプロジェクトに別れて活動しており、15回目の未来会議（定例会）が開かれた。

□概要

日　時　　6月20日（土）13:00-16:30
場　所　　京都御池創生館（京都市中京区）
参加者　　51名（うち委員：39名、傍聴者：12名）、F工房スタッフ1名

□内容

1）担当者による趣旨説明、NPO法人スタッフによる事例提供
2）プロジェクトミーティング

F工房スタッフは、他の運営スタッフとともにグループファシリテータとして同席した。「コミュニティサイクルの有用性」がテーマのグループを担当し、現状のヒアリングや議論の整理などをおこなった。

□成果・課題

今回のような市民参加型の協議体で、ファシリテーションが導入される機会における学外との協働可能性が広がったといえる。

また、このような議論の場にグループファシリテータとして関わる場合には、アイスブレイクの運用やプログラム設計の能力とは異なり、議論されている発言を聞き取り記録する、情報整理のためのフレームワークを提案するといった働きかけが必要となることが改めて確認された。

7）学外への調査

《大阪大学 教育学習支援センター主催FDセミナー》

□テーマ・趣旨

教育工学を専門とする特任助教の大山先生が講師を担当され、参加者同士の意見交換を交えながら「リフレクションとは何か」といった基礎から「リフレクションを促すツール」「リフレクションを導入した授業事例」など具体的な導入例までがレクチャーされるセミナー。F 工房がコーディネートする学生ファシリテータ（以下、学ファシ）の成長を促すためのリフレクション方法の改善を目的に参加した。

□概要

日　時　　9 月 9 日（水）14:30-16:30
場　所　　大阪大学　豊中キャンパス（大阪府豊中市）
参加者　　F 工房スタッフ 1 名

□内容

［セミナー内容］

・リフレクションとは、問題にぶつかった際、唯一解に向かうだけでなく、自らを振り返って客観視した上で解決に向かうことである。最終的には行為の選択肢を拡大し、次の試行につなげることが目指される。
・起きた事実、社会の中でどのように捉えられるか、異なる場面でどうすればよいかという「客観」と、自分の感情、解釈、今後の自分の思考・行動指針づくりといった「主観」の往還が重要となる。
・リフレクションには、慣れてしまい形骸化するという限界もある。対象がリフレクションに慣れているかどうかによって、「足場かけ」（リフレクションの意義を丁寧に解説する、質問項目を具体化する）と「足場外し」（質問項目の制限を減らすなどして自由度を高める）の使い分けが必要となる。

［F 工房事業への活用］

1.「リフレクション」の意義についての、具体的な解説の必要性

学ファシ同士のふりかえりや会議において、お互いが正しいと考えるやり方を押し付け合ってしまうような場面がしばしば見られる。F 工房では「ふりかえり」を重視しているが、その意義を一段階具体的に解説する必要性があると思われる。唯一解に向かう「技術的合理的（Non-Reflective）」なふりかえりではなく、複雑な状況を解釈し複雑な状況から学ぶ「省察的実践（Reflective）」が重要で、解は複数あるという解説をプログラムに組み込む必要がある。

2.「脱文脈」を参加者が意識できるプログラム設計

ふりかえりのプログラム終盤において、学ファシから「時と場合による」「考えすぎても仕方ない」といった発言が出されることがあるが、これは主観に留まり文脈に依存してしまっている状態だといえる。「こういう考え方もできる」「こういう場面では、こう行動す

ることもできる」といった、「脱文脈」の視点を意識できる問いをふりかえりシートに組み込むといった工夫が必要となる。

3. 新規学ファシ・継続学ファシに応じた「足場かけ・外し」の使い分け

学ファシ未経験者を対象とした「ファシリテーション Labo.」や「自己発見と大学生活」学ファシ活動のキックオフとなる事前研修においては、リフレクションの意義の丁寧な解説や、具体性の高い質問項目を設けたシート等を用いる必要があると思われる。一方で、ある程度の「慣れ」が出てくると予測される活動期間中のふりかえりシートについては、あえて質問項目の具体性を下げるなどして議論・対話の展開の自由度を高くし、リフレクションのマンネリ化を防ぐことが求められる。

□成果・課題

「事前研修」「ふりかえりの集い」等の単体のプログラム内に留まらず、活動期間（半期あるいは年間）を通じてリフレクションのサイクルをまわすことができるしくみの設計が必要である。「自己発見と大学生活」で活動する学ファシのふりかえりにおいては、「次の授業の段取りをどうするか」という客観の議論に終始する場合と、「自分はこのやり方が正しいと思うのだが、なぜ彼はそうしないのか」といった主観の議論に終始している場合とがみられ、「主観」と「客観」の往還が十分に起こっているとは言い難い。そのため、学ファシ自身の時間的な負担にも配慮しながら、主観と客観をうまく往還できるしくみづくりが今後の課題といえる。

8）コンサルティング

《高大接続授業「京都産業大学のキャリア支援」》

□概要

相 談 日　　5 月 13 日（水）

相 談 者　　国際交流センター事務室 職員

□内容

6 月 26 日（金）に実施される、高大接続授業（本学附属高校 KSU コース 3 年生対象）で実施するワークの内容について相談を受けた。本学進学への期待を感じ、進学後の取組み等について考える土台とすることが相談者のねらいであった。大学の特色に関するクイズを行った後、「今の自分を漢字一文字等で表現する」ペアワークや「やる気スイッチが入る時はどのような時か」という問いで過去の自分の生き生きと取り組んだときの状況を振り返り、大学進学後はどのような取組みをしたいか、どのような人材になりたいかなどを考えるワークを実施した。クイズやワークがアイスブレイクの役割を果たし、その後行われた講義への導入となった。

《共通教育科目「大学の歴史と京都産業大学」第11回授業》

□概要

相 談 日　　5 月 21 日（木）

相 談 者　　国際交流センター事務室 職員

□内容

6 月 22 日（月）に実施される第 11 回授業で実施するワークの内容について相談を受け、計 2 回打合せを行った。本学のコーオプ教育と学生時代に求められるキャリア形成についての講義への導入が目的で、提案したワークは、ペアワーク。話題は、（1）「いまの自分を漢字一文字、ワンフレーズ、絵などに表わす」（2）「やる気スイッチが入るときはどんなときか」の 2 つである。2、3 年次生が多く、ワークには慣れていて流れはスムーズであったが、話合い自体は表層的に終わりがちであった。全 15 回の授業設定の見直し、それを踏まえた上でのワークの検討が必要であると考える。

《情報センター学生サポートスタッフ「計算機運用補助員（MiCS）」への研修》

□概要

相 談 日　　7 月 7 日（木）

相 談 者　　情報センター 職員

□内容

8 月 6 日（木）に開催される MiCS スタッフを対象とする研修プログラムの内容について相談を受けた。合計 3 回の打ち合わせを通じて、グループディスカッションのテーマや進行方法、時間配分等について検討した。F 工房スタッフは当日現場を見学した上で情報センター職員との事後ふりかえりの機会を持った。なお、今回のように既に研修参加者同士に面識がある場合は、参加者同士の関係性が大きく場に影響することが F 工房スタッフの間で確認された。今後、同様の与件のコンサルティングをおこなう場合は、特に参加者

同士の関係性に着目したヒアリングを重視したい。

《グローバルサイエンスコース Monthly GSC》

□概要

相 談 日　（1）7月10日（金）、（2）10月16日（金）、
（3）1月15日（金）、2月18日（木）

相 談 者　学長室グローバル化推進室 職員

□内容

（1）7月15日（水）に開催されるグローバルサイエンスコース（GSC）の学生を対象とした月例勉強会で実施するグループワークについて相談を受けた。GSC 1期生が話合いを通じて、自分の将来のキャリアパスイメージに合わせた、相談できる先輩像を持てるようになることが相談者のねらいであった。なりたい将来の自分になるために今後1年間で必ず行うタスクを定め、タスクをクリアするために必要となる情報を集める際どんな人に相談すればよいかについて、付箋紙を使って意見出しを行うことを提案した。

（2）GSC1期生と2期生が初めて集う場において実施するワークの相談を受けた。今後の活動参画意欲向上に繋がるような関係づくりを目指すことが目標である。4人グループを組み、グローバルに対するイメージや夢について話し合う機会を作った。実施場所はPCルーム。ワーク後は、e-ポートフォリオの利用に関する説明と実習が行われた。

（3）次年度4月の第1回勉強会において実施するプログラムに関する相談を受けた。新入生に対してGSCの取り組みをアピールする。相談内容は、1期生と2期生の発表対決（「自分たちのGSCはこうである」など）の進め方についてであった。これに対し、参加型ポスターセッションを提案した。今後もコンサルティングを継続予定である。

《進路ミニガイダンス（法学部/2、3年次演習）》

□概要

相 談 日　7月14日（火）

相 談 者　進路・就職支援センター 職員

□内容

7月16日（木）に法学部2、3年次演習（吉永先生クラス）で開催される進路ミニガイダンスに関して相談を受けた。受講生から寄せられた質問に回答する際、就職に関する意識付けが効果的にできる方法についてともに検討した結果、質問テーマに基づいた受講生間の意見交換を取り入れることを提案した。

《平成27年度秋学期交換留学生歓迎会》

□概要

相 談 日　9月11日（金）

相 談 者　国際交流センター事務室 職員

□内容

9月16日（水）に開催される秋学期交換留学生歓迎会について相談を受けた。交換留学

生や、バディ、I-house アシスタント、教員等の関係者約 90 名が集う場において顔合わせ・交流が行われた。プログラムは既に決まっており、F 工房は事前にプログラムをヒアリングした上で、当日の見学とサポート、フィードバックを行った。

《LCSのグループワーク道場！》

□概要

相 談 日　　11 月 19 日（木）

相 談 者　　ラーニングコモンズ学生スタッフ（法学部 4 年次生）

□内容

12 月 11 日（金）にラーニングコモンズ学生スタッフ（LCS）が主催するイベントに関する相談を受け、グループワークで使用する道具の使い方を習得することを目的としたプログラムの設計についてともに検討した。12 月 16 日に実施した事後のふりかえりにおいては、多様な参加者層とニーズにその場でどう応えるか、参加者の表情をどう観察しどうかかわるか、という課題についてフィードバックをおこなった。

《学生FDスタッフAC燦主催　京産共創プロジェクトⅣ》

□概要

相 談 日　　12 月 8 日（火）

相 談 者　　学生 FD スタッフ AC 燦 所属学生 1 名

□内容

1 月 8 日（金）に実施される京産共創プロジェクトⅣにおいて、グループファシリテーションを行う AC 燦の学生に対する事前のファシリテーション研修内容について相談を受けた。当日の実施イメージを掴むための「模擬しゃべり場」の運営をする等、体験型の研修を行うことが決定した。

《経営学部中野幹久先生3回生ゼミ》

□概要

相 談 日　　12 月 17 日（木）、18 日（金）、25（金）

相 談 者　　経営学部中野幹久ゼミ 所属学生（3 年次生）

□内容

12 月 28 日（月）に実施される経営学部中野幹久先生ゼミの授業運営についての相談を受け、これまでゼミの中でゼミ生同士が感じていたことを共有し互いの成長を確認する機会づくりの方法についてともに検討した。事前にふりかえりシートを配布し、ここに記入した内容をゼミ生一人ひとりが定められた持ち時間の中で発表し互いに感想を返し合うというプログラムが相談者から提案され、実際にデモンストレーションを行いながら運営上の注意点等についてフィードバックをおこなった。

《コンピュータ理工学部　新入生オリエンテーション》

□概要

相 談 日　　12 月 18 日（金）

相 談 者　　コンピュータ理工学部事務室 職員

□内容

4 月 2 日（土）に実施する新入生同士が親睦を深めるためのイベントについての相談。複数回の打合せの中で担当教員にも参加頂き、プログラムの内容と運営体制を決定。F 工房は事前研修を企画・運営する他、学生ファシリテータも派遣することになっている。

《世界問題研究所主催　学生ワークショップ》

□概要

相 談 日　　12 月 24 日（木）

相 談 者　　法学部 4 年次生

□内容

2 月 20 日（土）に開催される世界問題研究所主催の学生ワークショップ企画担当の学生からの相談。グループワークセッションのテーマや進め方など、プログラム全般について計 5 回の打合せを行った。「自分は何を軸として生きているか、寄る辺の無い世の中で、何を武器にし、生きていくか。」について、「衣・食・住・職・人・他」の要素について自分のこだわりを付箋紙に記入するワークを行うことが決まった。

《理学部　入学前教育》

◎午前のプログラム

□概要

相 談 日　　1 月 18 日（月）

相 談 者　　理学部事務室 職員 2 名

□内容

3 月 31 日（木）実施の理学部入学前教育のプログラムについての相談。昨年度の内容をもとに、プログラムの内容と運営体制を決定。先輩学生スタッフに対する事前研修と学生ファシリテータの派遣を行う予定。

◎午後のプログラム

□概要

相 談 日　　3 月 1 日（火）

相 談 者　　理学部教員、理学部事務室 職員 2 名

□内容

3 月 31 日（木）実施の理学部入学前教育のプログラムについての相談。例年、学科毎で行っていたプログラムを変更し、前半は、学内施設見学、後半は、ゲームを通じて、人間関係も構築しながら、理学部における思考の仕方も体験できるプログラム内容に決定。

先輩学生スタッフに対する事前研修を行う予定。

《フレッシャーズ・コミュニケーション》

□概要

相 談 日　　1 月 20 日（水）

相 談 者　　同窓会担当職員 2 名

□内容

4 月 9 日（土）、10 日（日）に開催される同窓会主催「フレッシャーズ・コミュニケーション」のプログラムについての相談。次年度より一部プログラムの変更がされることをふまえ当日のワークを決定した他、F 工房は事前に在学生ボランティアに対する研修も行うことになっている。

《文化学部スターティング・セミナー2016》

□概要

相 談 日　　1 月 21 日（木）

相 談 者　　文化学部担当教員 2 名

□内容

4 月 2 日（土）に実施する文化学部新入生対象のプログラムについて、昨年の振り返りをしながら今年度のプログラムを担当教員とデザイン。ふりかえりの当日実施、クラスを担当する学生ファシリテータと先輩学生の組み合わせを事前に決定することを提案した。

《アイデアソン体験＆勉強会》

□概要

相 談 日　　2 月 18 日（木）

相 談 者　　総合生命科学部 教員

□内容

NPO 法人アイデア創発コミュニティ推進機構（iCON）が主催するアイデア創発ファシリテーター養成講座に参加した教員からの相談。講座で学んだアイデアソンの理論と実践を広めるべく、学内の教職員と在学生がアイデアソンの企画運営および参加を実践・体験する場を開く。3 月 22（火）実施予定。F 工房は、企画運営にかかわるコンサルテーション、当日のワークに参加し、アイデアソンに関する学びを得る。

《第21回FDフォーラム第3分科会》

□概要

相 談 日　　3 月 3 日（木）

相 談 者　　第 3 分科会運営企画サポート学生

□内容

3 月 6 日（日）に公益財団法人大学コンソーシアム京都が主催する「第 21 回 FD フォーラム」において第 3 分科会の企画サポートを担当する本学の学生からプログラム設計についての相談を受けた。120 人規模の参加者を対象とした総括討論の時間の使い方についてともに検討した。

第２部　活動から得られた知見

1. ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージについて

1．はじめに

近年、従来の「教員が何をどう教えるか」に主眼をおいた「教育」から、学生が何をどう学ぶかに主眼をおいた「学習」へのパラダイム転換が活発に議論されるようになった。そうした流れの中、学習者による能動的な学習活動を授業に組み込んだ、いわゆる「アクティブラーニング型授業」への関心が高まり、その授業スタイルに有効な具体的ノウハウに関する情報交換がなされている。本学においても、ラーニングコモンズの開設以来、「アクティブラーニング」というキーワードが頻繁に聞かれるようになった。

一方、ファシリテーションは場に参集したメンバー間の対話を促進する手法である。正課・正課外の学習の場において、F 工房もこれまでメンバー間の対話を促進することで学習支援の役割を果たして来たし、6 年間に及ぶ支援活動の中で、どのようにして場に参集するメンバーが自らの考えを発するような場づくりができるかについてのノウハウを蓄積してきた。

このような状況下で、2014 年度の終わりにコーオプ教育研究開発センターのスタッフから、これまで蓄積されたファシリテーションのノウハウをパッケージにまとめたものを作成し、主に教員に向けて発信することでファシリテーションのより一層の普及をはかってはどうかという提案がなされた。F 工房は直ちにこの提案を検討し、今後ファシリテーションをキャリア教育にとどまらず学部教育に浸透させていくための有効なツールになりうると判断し、2015 年 4 月より早速作成を開始した。

パッケージ作成に向けて F 工房スタッフはコーオプ教育研究開発センタースタッフと協議を重ねたが、協議の過程でパッケージの表題を「ファシリテーション・パッケージ」ではなく「アクティブラーニング・パッケージ」に変更する提案がなされ、了承された。教員にとってはより直接的にファシリテーションとアクティブラーニングを結びつけたツールがより手に取りやすいのではないかと判断したからである。こうしてほぼ半年の準備期間を経て「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」が誕生したのである。

2．パッケージの内容

パッケージは、これまで F 工房が蓄積して来たファシリテーションによる授業支援のノウハウを整理し、アクティブラーニング型授業に簡便に取り入れることができるよう可能な限り形式知化して作成した。パッケージは以下の要素から構成される。

1）アクティブラーニング実践におけるファシリテーションの有効性について

2）ファシリテーションのノウハウをアクティブラーニング型授業へ組み込んだ領域別事例

① 語学等初回授業：当該言語を用いて受講生同士が全員と自己紹介する機会を通じた学びの共同体づくり

② 初年次ゼミ授業・専門ゼミ授業：受講生の関心領域に応じたグループ分けと研究プロジェクトの企画を通じたアカデミックスキルの養成、グループディスカッションを取り入れることによる専門性の深化

③ 講義授業（小規模～大規模）：グループ内での話し合いを通じて、授業の主題への意識をつくる

④ 学部別入学前・後オリエンテーション：新入生に教員や学部の先輩を交え「大学生

活への不安や期待」について話し合う

⑤ 課外活動：部活動・サークル等における、学年や立場を超えたメンバー同士の意見交換、組織内の対話の促進

3）プログラム進行に有効なファシリテーション・ツール

① アイスブレイク系：面識の薄い人同士が触れ合うときの緊張をほぐすツール

② チームビルディング系：目標に向けて協力し合える組織を作るためのツール

③ グループ分け系：受講生を偶発性や特性によってグループに分けるツール

なお、パッケージの作成、発行と相前後して、教育支援ツールの浸透を推進し、またその成果を検証するため調査研究を行うことが決まった。そのため、F 工房とまだ連携してはいないがアクティブラーニングをすでに実施している、もしくは関心の高いことが分かっている教員を本学の全学部から 1 名ずつ、計 8 名選び、パッケージの有用性に関する質問紙調査及びヒアリング調査を行った。これは、各学部 3 名程度を予定している本調査の予備的な調査として行ったものである。

予備調査は 2 段階で行った。まず質問紙により、パッケージを提示した上で、教員 8 名に対し、1）アクティブラーニング導入への意思、2）パッケージの有用性について尋ねた。この回答結果を踏まえ、半構造化インタビューを設計し、先の 8 名の教員に対し、ヒアリングを行った。ヒアリングの質問項目は1）アクティブラーニング実践の有無、2）教員が既にアクティブラーニング型授業を実践している場合、その詳細、3）パッケージの有用性について、であった。

3．パッケージ配布および予備調査の成果・課題

1）ヒアリングを行った教員全員が、若干の留保をつけながらもアクティブラーニングを肯定的に捉えていることが分かった。初年次ゼミ授業において、また一部の専門講義科目においてアクティブラーニングが構造的に組み込まれたプログラムがある程度浸透していることもわかった。さまざまな要因によって他者と対峙する意欲やスキルを阻害された状況にある学生に対し、教員たちがアクティブラーニング的手法を駆使して活性化を試みている状況が見てとれる。

2）パッケージについては、質問紙調査の結果、8 名の教員全員から、パッケージを参考にしつつ担当授業へのファシリテーションの導入を検討したいと、その有用性を認められた。有用性をより詳細に検討するために、ヒアリングで得られた教員たちのニーズを表すキーワードから 17 のカテゴリを抽出し、またそれらを 5 つの領域に分類した。

領域	カテゴリ
(1)アクティブラーニング理解	①体系的知の定着に有効 ②外化の促し ③議論から熟考への過程 ④学びのコミュニティづくり
(2)学生像	⑤対話・議論に不慣れな学生像 ⑥興味を抱くことに困難を抱える学生像
(3)実践例	⑦ジェネリックスキル、アカデミックスキル学習の展開 ⑧専門知識を土台とした展開

	⑨専門科目の中での教員や学生の工夫
(4)本パッケージの課題	⑩外化をどう促進するか ⑪個別ケースに応じた導入方法 ⑫アクティブラーニングの意義、学習効果の提示が欲しい
(5)アクティブラーニング実践の阻害要因	⑬導入の目的と効果の不明確さ ⑭アクティブラーニング＝グループワークという思い込み ⑮学生間の多様性に対処しきれないという懸念 ⑯成績評価の困難さ ⑰実践する教員を支援する仕組みの不足

概括すると、最初の 3 つの領域において提示されたニーズに対して、パッケージはある程度応える内容となっているといえる。学生像領域のカテゴリ⑤、⑥に示されたニーズについては、パッケージに言及はないが、開発時点でこのような学生の存在が前提となっているために、対応可能な内容となっている。

カテゴリ⑩～⑫に示されたパッケージの課題、および⑬～⑰に示されたアクティブラーニング推進の阻害要因については、記述の追加やさらなる議論が必要であることが確認された。以下に、領域ごとにより詳細な検討を加える。

（1）パッケージの有用性

今回のパッケージは受講生同士の関係構築や初年次ゼミへの導入にあたって特に有用であることが確認された。カテゴリ②からは、講義中の学生の発言の促しといった外化の促進の必要性が認識されていることがうかがえる。パッケージでは講義授業へのアクティブラーニングの導入事例も示している。

⑤⑥からは、他者との関係性構築に不慣れであったり困難を抱えていたりする学生と教員が接している実態がうかがえる。パッケージには、受講生同士の間に相互受容的な風土を形成することをねらいとした「アイスブレイク系ツール」を複数掲載している。ツールを活用することによって、受講生の抱く他者との関係性構築に対する不安や懸念を低減できる効果が期待できる。また、④ではアクティブラーニングの理解について受講生同士の関係性構築について触れられており、授業において受講生同士の関係性を構築するためのノウハウ提供のニーズにも応えられているといえる。

⑦からは、本学において初年次ゼミにおけるアクティブラーニングがある程度浸透している状況がうかがえる。初年次ゼミにおいては、今回の教育支援ツールでは、初年次ゼミ授業における受講生同士の関係性構築にとどまらず「アカデミックスキル養成」「研究プロジェクトの企画」を主題とした授業設計の例を示している。

（2）教育支援ツールとしての課題

一方、専門科目へのアクティブラーニングの導入方法およびアクティブラーニング導入そのものの意義や効果の提示などについては、課題を残した。⑧からは一部の専門講義科目においてアクティブラーニングが構造的に組み込まれたプログラムが一定程度浸透していることが、⑪からは専門科目へのアクティブラーニング導入に役立つ手法を知りたいといった教員のニーズがうかがえる。①は体系的知識の定着にアクティブラーニングが有効であると考える教員がいることを物語っている。今回の教育支援ツールでは「専門ゼミ授業への導入例」と題して、授業展開の一例を紹介している。しかし、「問いを設定する」「受講生同士で話し

合う」といった授業展開のステップの提示にとどまっており、これらをスムーズに展開するためのノウハウは具体的には提示されていない。

⑭からは、専門知識の習得とアクティブラーニングは両立し得ないのではという教員の認識がうかがえる。しかし、講義・個人作業・ペアワーク・グループワークを使い分けることによってアクティブラーニングの導入は可能である。授業の到達目標に応じて適切なツールを活用しつつ、プログラムをデザインする必要性について記述する必要があるだろう。また、⑬ではアクティブラーニング導入の目的と効果を具体的に示す必要性が示唆されている。

一方、⑩では「外化の促し」が課題として挙げられている。ここでは、学生同士の議論の場において「周囲にどう思われるか」が気になって活発な議論が成立しないという課題が見てとれる。今回のパッケージでも初年次ゼミ、専門ゼミにおけるディスカッションを取り入れた授業設計例を示しているが、上述のような学生の懸念をいかに低減するかといった具体的なノウハウについては触れられていない。今後、学生同士が議論し合うといった場面における外化の促しのノウハウについても蓄積・発信する必要があるといえる。

⑮では、発達障がいと見られる学生や、授業に対して消極的な学生など多様な学生像に向き合う必要性が指摘されている。⑨では、構造化されてはいないものの、教員が授業において創意工夫を重ねながら学生と向き合っている様子がうかがえる。パッケージでは「構造化されたプログラム」を主に取り扱っており、構造化されていない教員の工夫の実例やその効果については紹介していない。しかしながら、⑮で指摘されているような学生への対応については、構造化されたプログラムの実践だけでは対応が困難であり、対人関係スキルとしてのファシリテーションが貢献できる可能性の高い領域であるといえる。なお、③⑫⑯⑰については、教育支援ツール開発とその普及という範疇に留まらず、より広い視点からの議論が必要である。

（3）「ファシリテーションを組み込む」ことの意味

今回の予備調査を通じて、F 工房がファシリテーションのツールとして実践し蓄積してきたものはアクティブラーニングのツールとしても有用であることが明らかになった。とすれば、ファシリテーション・ツール＝アクティブラーニング・ツールなのであろうか。構造化されたプログラムを設計し、実践し、振り返る段階において両者に大きな違いは見られない。しかしながら、たとえばグループワークにフリーライダー的学生や発達障がいを持つ学生が参加した場合、言い換えると非構造化された対応が必要となる場合、教員・学生という枠組みにとらわれず、その場に参集するメンバー間で自らの考えを述べあうことを支援するファシリテーションが、有用な方策を提示できるであろうことが示唆された。

2. F 工房主催フォーラム「ファシリテーションをふまえた能動的学習の展開に向けて」
― 今後の教育現場にそのマインドとノウハウをどう活かすか ―

１．はじめに

本学キャリア教育を実践する中で産声をあげたF工房の事業は近年、キャリア教育の枠組みを大きく越え、学部教育、共通教育、正課外活動など多岐にわたる。次年度からは教育支援研究開発センターに移管されることが内定しているが、移管後の全学展開の方向性を議論するため学外からコメンテータを迎え、幅広い視点から意見交換を行い、より良い全学展開に向けたビジョンを参加者と共に描くためのフォーラムを開催した。なお、以下の文章中、「アクティブラーニング」と「能動的学習」は文脈によって多少使い分けしているものの、全く同義の言葉として用いている。

２．2015 年度事業報告

F 工房事業統括の鬼塚およびスタッフの鈴木より本年度の事業報告がなされた。事業の柱は１）教育プログラムの運営支援、２）課外活動運営支援、３）ファシリテータ養成、４）各種プログラムのコンサルティング、５）アクティブラーニング・パッケージの作成と配布であった。このうち１）～３）は前年度までと比較して格段の変化は見られなかったが、４）のコンサルティングについては、前年度までと比べて件数が大幅に増えただけでなく、これまであまり接触のなかった進路・就職支援センター、情報センター、国際交流センター、経済学部などからコンサルティングの依頼があったことが報告され、ファシリテーションのニーズが徐々に広がりつつあることが実感された。

５）のパッケージは全くの新規事業であり、パッケージの作成・配布と調査を組み合わせて実施した点に特色がある。調査の詳細は高等教育フォーラム第 6 号に譲るが、報告の中で強調されたのは、能動的学習の実践はすでにある程度学内に浸透しており、その意味で F 工房の役割はノウハウの開発というより実践例を仕入れて手を加え、汎用モデルとしてアレンジしたものを卸売りする「問屋」的なものとなるのではないか、というビジョンが示された。

最後に、移管を前に F 工房スタッフが抱えている不安や迷いが表明された。端的に言えば、不安は①F 工房はファシリテーション・ノウハウの卸問屋機能を追求すればよいのか、②そもそもファシリテーションのマインドとノウハウは能動的学習の推進事業を担うに足るものなのか、という 2 つの疑問に集約される。これらの疑問に応えるかたちで学外コメンテータのコメントが始まった。

３．学外コメンテータからの助言・提案

大学では機械工学と情報工学を学び、現在は岡山大学高等教育開発推進機構でアクティブラーニング型授業の実践と研究に取り組んでおられる大﨑理乃さんは、まずアクティブラーニングが注目されるようになった背景として、１）日本が工業化社会から知識基盤社会へ移行するとともにグローバル化に伴ってコミュニティの参加者が多様化したこと、２）そうした環境のもとではもはや旧来の「正解を知っている」ことはあまり意味をもたず、多様な他者と協働しつつ「最適解を見つけ出す力」が求められること、３）しかし学生は依然として（川中さんのいう）「教授パラダイム」の内にあり、物事は「教えてもらうもの」という学習

観にとらわれている。最適解を見出す力を養うには自立的・主体的に学ぶ環境が必要となる、４）ここでいう自立的に学ぶとは、「既有の知識や経験に関連づけながら概念や原理を全体的に理解しようとする深い学習」と定義付けられる。引用された Allen & Tanner によるアクティブラーニングの定義「新しい情報を探求し、その情報を意味のある形で構成し、さらにそれを他者に説明する機会が設けられている」が興味深かった。

次に、昨年 11 月に F 工房の母体となったキャリア科目「キャリア・Re-デザイン」の授業を見学された際の印象として、１）教員と学習支援者（ファシリテータ）の協働が工夫されている、２）学習者間の対話のデザインが工夫されている、と述べたうえで、３）学習者が、学びを「受ける」から「自ら行う」に転換する可能性を感じたと述べられた。また F 工房の報告書からは、F 工房が学生ファシリテータを募集し、研修を提供しつつさまざまなプログラムに派遣している事実をふまえ、F 工房は学生たちを巻き込む力を発揮しているのではないか、と指摘。またそうした力を今後も展開していくには、F 工房のいうファシリテータ・マインドとは何か、ファシリテーションを通して学ぶことは何かを言語化していくことが重要ではないか、と提言された。

また能動的学習が陥りやすい罠として、グループワークなど学習者が能動的な何かを行えばそれでよし、とする傾向があるが、ファシリテーションのツールを使って学んだことが果たして本当の学びなのか問わなければならない。F 工房の持つマインドとノウハウを用いて京都産業大学で能動的学習を展開していき、共同体として学び合える環境がつくっていけるのかどうか、期待しつつ見守っていきたい、と結ばれた。

シチズンシップ共育企画の川中大輔氏さんは、カール・ロジャーズ（『人間中心の教師』）を引用しつつ、ファシリテーションと能動的学習の関係を四象限を用いて示された。それによると、伝統的様式の講義はティーチングベースの受動的活動であり、これをより能動的にしたものが（たとえばサンデル教授の授業にみられるような）教授パラダイム内の能動的学習である。これに対し、ファシリテーションベースの受動的活動を「見せかけの参加型学習」と川中さんは呼び、より能動的学習への導入として意味がある、そしてこれをより能動的なものに推し進めたものが学習パラダイム内の能動的学習である。ここではファシリテーションはティーチングの対義語として用いられており、その根拠はパウロ・フレイレの「教育とは伝えあいであり、対話である。知識の伝達などではない。それは語り合う主体相互の出会いなのだ。それぞれの頭の中にある考えを、おたがいにとって意味あるものたらしめようとする努力なのだ」という考え方に求められる。こうしたフレイレの考え方に基づけば、伝統的講義様式の授業においては、世界を認識した教員が主体として客体である学生に認識したものを伝える活動であり、ここにおいては学生は自ら認識するという活動から疎外されている状態にある。これに対し、対話による教育においては、学習者は直接的に世界と向き合いそれを認識する主体と位置づけられる。ここでの教員の役割は世界を認識しようとする学習者を、共に学ぶ立場から支援することであり、それは教員というよりむしろファシリテータと呼ばれるべきものとなる。つまるところ、学習パラダイムにある授業においては、教員と学習者が共に主体的に世界と向き合い、互いに（学習者同士を含めて）協働しつつ世界を認識する活動となる。

学習パラダイムはこうして「学習者を主語とする学びの世界」と規定されるが、川中さんはさらにその目的は「学習者が学習のしかたを学ぶ」ところにあるとする。それには学習者

がみずからの学習過程についての分析者となることが求められている。なぜなら「(学習者がみずからの学習過程の分析者になるということは) 学習者がみずからの学習を高めるためにすすんで他者という資源を捜し求め、かつそれを活用する能力の開発ということを含んでいる。そして、それと引き換えに、学習者が相互に援助しあえる有効な資源になるということを、そのことは意味する」(L.P. ブラッドフォード・J.R. ギッブ・K.D. ベネ編『感受性訓練』)。

川中さんは最後に、F 工房の卸問屋的機能に触れ、この機能は「中抜きされたらおしまいでっせ」。中抜きされないためには信頼度を高めるのが肝心だが、事業の信頼度の源泉は専門性にあり、ここでの「専門性」の構成要素として①アドボカシー機能 (学内外への政策提言)、②地域資源の発掘・開発・仲介機能、③地域資源との協働コーディネート機能、④相談・コンサルティング・講師派遣機能、⑤研修機能、⑥ネットワーキング機能、⑦情報の収集・編集・提供・発信機能、⑧場所・施設・機材の提供機能、の 9 つの機能を指摘したうえで、どの機能が求められているのか見極める必要があると指摘していただいた。

4. 討論

参加者がそれほど多くなかったこともあり、コメンテータのお二人、教育支援研究開発センター長小林満さんを含め、全員が車座になって議論するかたちとなった。

まず、多くの学生が依然として教授パラダイムのうちにある状況のなか、学生が主体的学習者となるには学習者が新たなアイデンティティを獲得することと関連するのではないか、という意見が出された。たとえば法学部の学生にとって法学を主体的に学ぶということは「自分は法学部の学生だ」という自覚の形成と不可分であるというわけである。これに応えて、依然として教授パラダイムの内にある学生が自律的・主体的学習者となるのは Unlearn つまり「学びほぐし」「学びなおし」のプログラムを通じて教授パラダイム的価値観を揺さぶる必要がある、実際にキャリア科目「自己発見と大学生活」においては高校・予備校的学習観を揺さぶりかけることを通じて「自分は京産大生だ」というアイデンティティの醸成が目指されているし、学部の導入教育プログラムや初年次ゼミ科目では「自分は〇〇学部生だ」という自覚を促すことが目指されているとの指摘があった。

学生が自律的・主体的学習者となる過程を阻害する要因としてしばしば指摘される、参加意欲の低い学生、発達障害などをもつ学生を含めすべてのメンバーが学びにコミットできる環境をどうつくっていけばよいかと疑問に対しては、二つの助言が提示された。一つはラーニングコモンズ、F 工房、ボランティアセンター、学生相談室など直接支援を行っている部署が緊密に連携していくこと、連携のイニシアティブは教育支援研究開発センターが担えるのではないかという可能性、もう一つは少年院などで実践されている社会化教育プログラム（ソーシャルスキル・トレーニング）を参考にすること、である。

自律的・主体的学習の典型的例として、極めて少数だけれども学生から「これを書いたので読んでください」と言ってくるケースが教員から紹介された。授業内のルーティンを超えた活動が学生から示されたときに初めてそれは自律的・主体的学習者といえるのではないか、という問題提起であった。続いてこのような活動を促進するために教員ができることは何かという議論になり、幾つかの提案が示された。一つは余裕のあるカリキュラムが前提となるが、教員が学生に対して「私を驚かせてください」と挑発するもの。また、ゼミの授業などで教員が抜き差しならない「問い」を学生に投げかける、というもの。この場合、少人数で

難しい「問い」に取り組む仕組みがあってもよいし、そうすることで学生の活動が教員との双方向型に止まらず学習パラダイムに則った能動的学習となる。

そこから、この問題は直ちに評価の在り方と関連する、という意見が出た。伝統的な教授パラダイムに則った評価方法は診断的または総括的評価と呼ばれるもので、学期末のテストやレポートのかたちで「教員によって伝達された世界認識を学生がどこまで理解したか」を診断するタイプのものである。このタイプの評価の目的は、学習者が自分がどこまで理解したかを把握するところにある。一方、学習パラダイムに依拠した能動的学習の場では学習プロセスを学生がリアルタイムで振り返り言語化することが求められるので、学習プロセスの節目節目で教員が「〇〇について説明してください」と問いかけ、それに対して学習者が応え、その応答に対して教員がフィードバックする、というようなかたちで行われる形成的評価方法が必要となる。このように能動的学習には独自の評価方法と結びついているという指摘は極めて重要だろう。

最後に、学習パラダイムに依拠した能動的学習を推進していくには、教員自身が、自分が教授パラダイム（「俺の話を聴け！」）の内にあることを認識し、学習パラダイム（「あなたの話を聴かせて」）へと自覚的に移行していくことが求められるが、そのためには教員自身の「Unlearn 学びほぐし」が必要となる。この移行を促進するには FD の一環として組織的に取り組んでいくことが必要であるという意見が出された。しかし「あなたの話を聴かせて」という教員の問いかけにすべての学生が応えるような状況（「学生ファシリテータ１万人計画」という標語も出されたが……）を一気につくりだすのは現実的でなく、まずは２～３割の学生を学習パラダイムに取り込む戦略が有効ではないかという意見も出された。

５．まとめ

以上をまとめると、

1） 教授パラダイムから学習パラダイムへの移行は社会の変化に対する大学からの応答であり、必然性を持つ。

2） 学習パラダイムに依拠した能動的学習を展開していくにはファシリテーションは不可欠である。

3） 学習パラダイムに依拠した能動的学習とは学習者が自律的・主体的に学ぶことであり、そこにおいて教員は自らの世界認識を学生に伝達する人ではなく、学生と協働しつつ共に世界を学ぶ人となる。

4） 学習パラダイムへの移行を促すには、「学生が自律的・自主的学習者となるとは具体的にどういうことか」「そうしたプロセスを支援するファシリテータ・マインドとはどのようなものか」「評価の方法はどうあるべきか」など、基本的な問いかけをそれぞれの現場で常に発し、応答を言語化していくことが求められる。

5） 能動的学習の取組みは本学でもさまざまな場で実践されており、実践知を共有する仕組みが求められている。

6） 学習パラダイムへの移行を促すには、教員の「学びほぐし」が必要となるが、これには組織全体が FD 活動の一環として取り組むことが肝心である。

となる。ここから「F 工房の今後の役割は何か」という問いへの豊かなヒントをいただいたことは間違いない。

活動を振り返って

2015（平成27）年度のF工房の活動を振り返ってみると、3つのことが頭に浮かぶ。まず、小冊子「ファシリテーションを組み込んだアクティブラーニング・パッケージ」を発行し、それに伴って調査を実施したこと。もともとコーオプ教育研究開発センター職員の方々のアイデアを具現化したものだが、自分たちのノウハウの蓄積を棚卸しできたこと、コンパクトなかたちでノウハウを発信できたこと、調査を通じてすべての学部の先生方と面談する機会を得たこと、この3つの意味で画期的なプログラムとなった。

二つ目は、WACEや教育工学会への参加、ファシリテーション研究会やフォーラムの主催を通じて新たなネットワークを構築できたことがあげられる。学会ではジグソー法や反転学習について学ぶことができたし、研究会やフォーラムではファシリテーションそのもののもつ深さと広がりを実感することができた。

三つ目は、秋以降コンサルティングが急増し、これまで接触のなかった部署や学内団体とつながることができたこと。来年度は所属がキャリア教育から教育支援に移ることになるが、こうした身近な分野でもファシリテーションが定着しつつあることを実感することができた。

もちろん課題は山のようにある。しかしブレのないファシリテータ・マインドとネットワークと探求心さえあれば、次の年も軽いフットワークで乗り切っていけると思っています。教育支援の関係者の方々、よろしくお願いします！

F工房事業統括/文化学部教授　鬼塚哲郎

参考資料

今年度も、F 工房は学内の多くの現場に「参加型の場」を創出してきました。

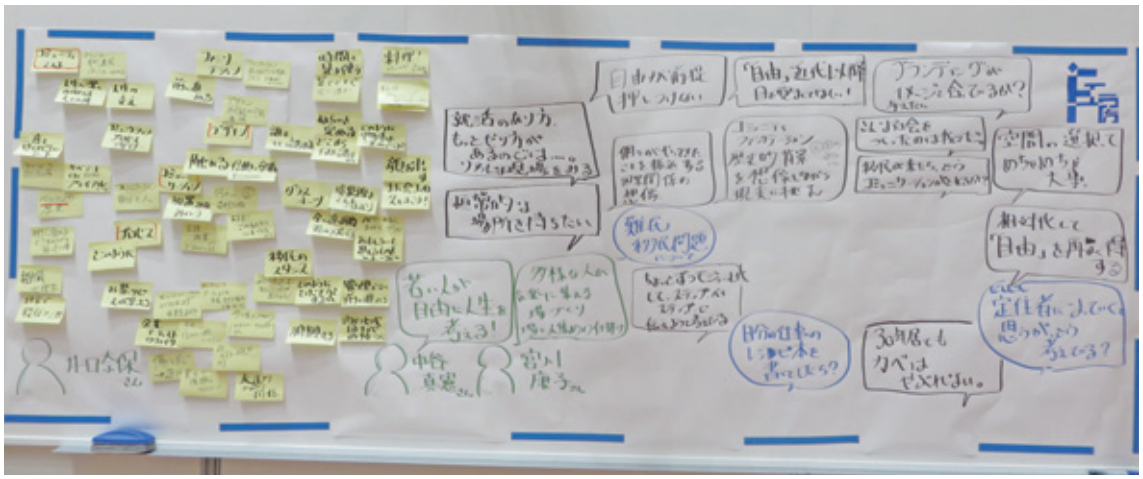
そしてその場では、参加者の笑顔や前のめりの姿勢、他者と向き合い、

課題と対峙する人々のイキイキとした姿を多く見ることができました。

巻末ページでは、その様子の一端をご紹介いたします。

1. ファシリテーションの実践事例

■発言を「見える化」する方法



↑模造紙を連結させてリアルタイムに記録する

＊ファシリテーション研究会

←カテゴリー分けして会場全体で共有する

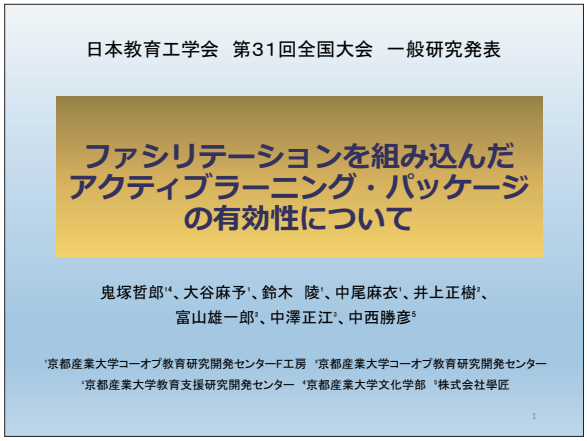
＊キャンパスシステム研究会

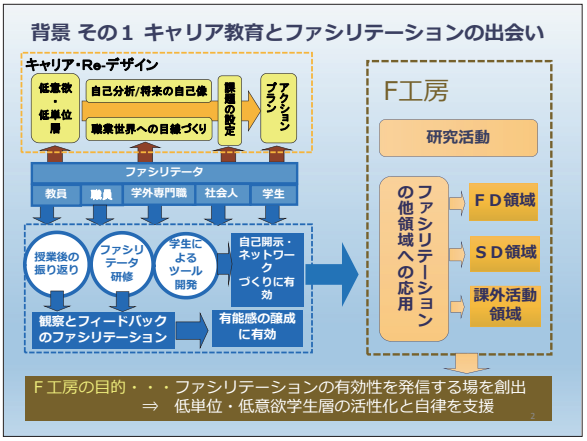
■参加者から運営側へ

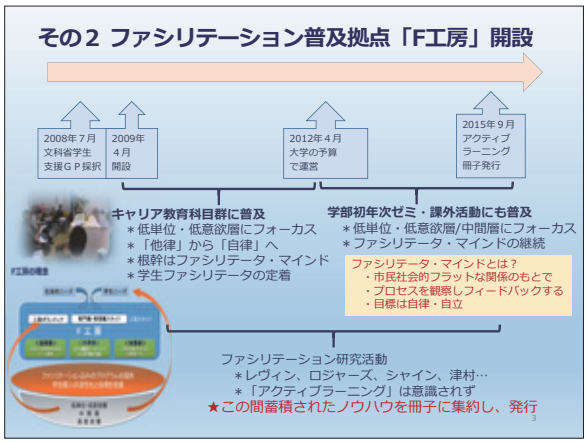
プログラム参加者が自らワークショップをデザインし、実践し、ふりかえる ＊ファシリテーション Labo.

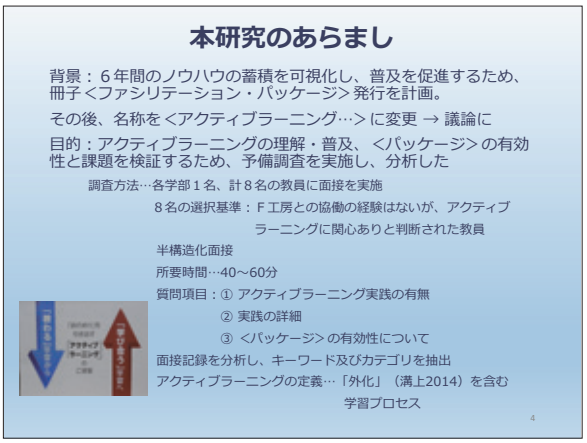
2. 発表資料（日本教育工学会 第31回全国大会より）

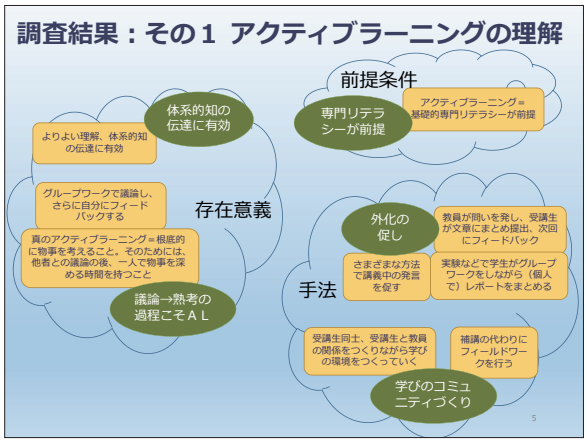
２０１５年９月２２日（火）　電気通信大学において

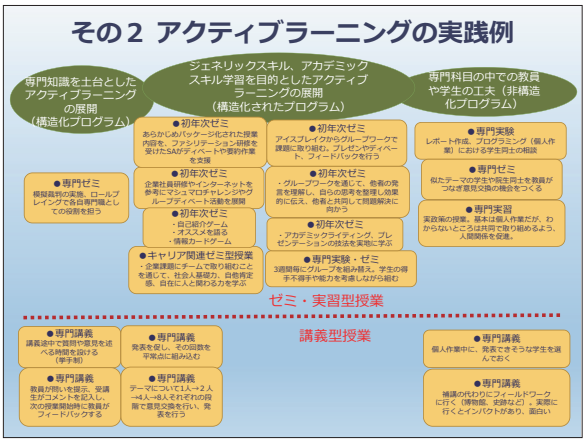


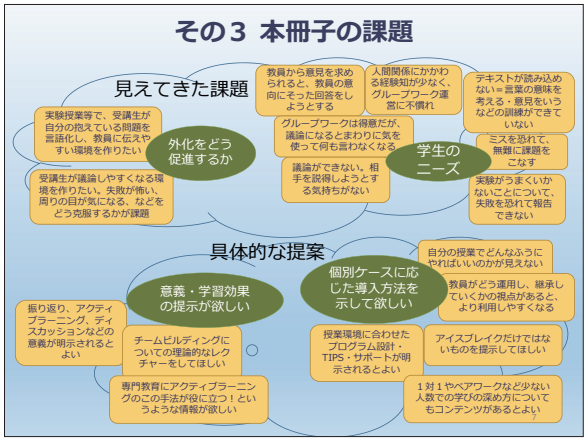


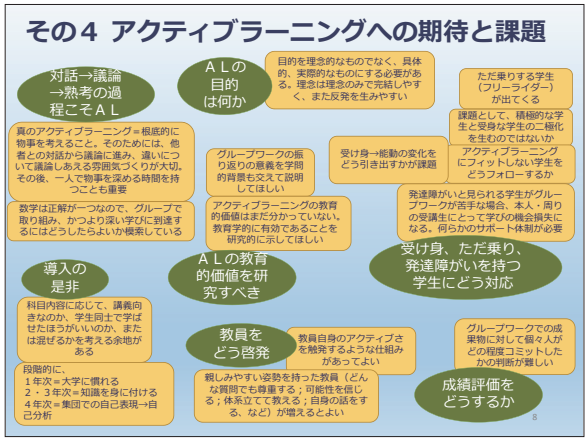


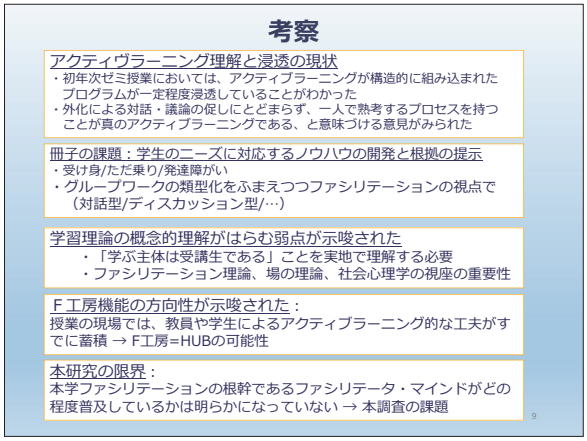







その３ 本冊子の課題
見えてきた課題
外化をどう促進するか
実験授業等で、受講生が自分の抱えている問題を言語化し、教員に伝えやすい環境を作りたい
受講生が議論しやすくなる環境を作りたい。失敗が怖い、周りの目が気になる、などをどう克服するかが課題
学生のニーズ
教員から意見を求められると、教員の意向にそった回答をしようとする
人間関係にかかわる経験知が少なく、グループワーク運営に不慣れ
グループワークは得意だが、議論になるとまわりに気を使って何も言わなくなる
議論ができない、相手を説得しようとする気持ちがない
テキストが読み込めない＝言葉の意味を考える・意見をいうなどの訓練ができていない
ミスを恐れて、無難に課題をこなす
実験がうまくいかないことについて、失敗を恐れて報告できない
具体的な提案
意義・学習効果の提示が欲しい
振り返り、アクティブラーニング、ディスカッションなどの意義が明示されるとよい
チームビルディングについての理論的なレクチャーをしてほしい
専門教育にアクティブラーニングのこの手法が役に立つ！というような情報が欲しい
個別ケースに応じた導入方法を示して欲しい
自分の授業でどんなふうにやればいいのかが見えない
教員がどう運用し、継承していくかの視点があると、より利用しやすくなる
授業環境に合わせたプログラム設計・TIPS・サポートが明示されるとよい
アイスブレイクだけではないものを提示してほしい
１対１やペアワークなど少ない人数での学びの深め方についてもコンテンツがあるとよい
7


その４ アクティブラーニングへの期待と課題
対話→議論→熟考の過程こそＡＬ
真のアクティブラーニング＝根底的に物事を考えること。そのためには、他者との対話から議論に進み、違いについて議論しあえる雰囲気づくりが大切。その後、一人で物事を深める時間を持つことも重要
数学は正解が一つなので、グループで取り組み、かつより深い学びに到達するにはどうしたらよいか模索している
ＡＬの目的は何か
目的を理念的なものでなく、具体的、実際的なものにする必要がある。理念は理念のみで完結しやすく、また反発を生みやすい
グループワークの振り返りの意義を学問的背景も交えて説明してほしい
アクティブラーニングの教育的価値はまだ分かっていない。教育学的に有効であることを研究的に示してほしい
ただ乗りする学生（フリーライダー）が出てくる
課題として、積極的な学生と受身な学生の二極化を生むものではないか
受け身→能動の変化をどう引き出すかが課題
アクティブラーニングにフィットしない学生をどうフォローするか
発達障がいと見られる学生がグループワークが苦手な場合、本人・周りの受講生にとって学びの機会損失になる。何らかのサポート体制が必要
受け身、ただ乗り、発達障がいを持つ学生にどう対応
導入の是非
科目内容に応じて、講義向きなのか、学生同士で学ばせたほうがいいのか、または混ぜるかを考える余地がある
段階的に、
１年次＝大学に慣れる
２・３年次＝知識を身に付ける
４年次＝集団での自己表現→自己分析
ＡＬの教育的価値を研究すべき
教員をどう啓発
教員自身のアクティブさを触発するような仕組みがあってよい
親しみやすい姿勢を持った教員（どんな質問でも尊重する；可能性を信じる；体系立てて教える；自身の話をする、など）が増えるとよい
グループワークでの成果物に対して個々人がどの程度コミットしたかの判断が難しい
成績評価をどうするか
8


考察
アクティヴラーニング理解と浸透の現状
・初年次ゼミ授業においては、アクティブラーニングが構造的に組み込まれたプログラムが一定程度浸透していることがわかった
・外化による対話・議論の促しにとどまらず、一人で熟考するプロセスを持つことが真のアクティブラーニングである、と意味づける意見がみられた
冊子の課題：学生のニーズに対応するノウハウの開発と根拠の提示
・受け身/ただ乗り/発達障がい
・グループワークの類型化をふまえつつファシリテーションの視点で（対話型/ディスカッション型/…）
学習理論の概念的理解がはらむ弱点が示唆された
・「学ぶ主体は受講生である」ことを実地で理解する必要
・ファシリテーション理論、場の理論、社会心理学の視座の重要性
Ｆ工房機能の方向性が示唆された：
授業の現場では、教員や学生によるアクティブラーニング的な工夫がすでに蓄積 → F工房=HUBの可能性
本研究の限界：
本学ファシリテーションの根幹であるファシリテータ・マインドがどの程度普及しているかは明らかになっていない → 本調査の課題
9

参考資料

3. 広報物作成

２０１５年８月作成　Ｆ工房アクティブラーニング･パッケージ　ツール紹介

※パッケージ内容の詳細は p.７８～８１参照　http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/f/action/alp.html

平成 27 年度　F 工房活動報告書

平成 28 年 3 月 31 日発行

発行・編集　京都産業大学コーオプ教育研究開発センターF 工房
〒603-8555　京都市北区上賀茂本山
TEL：075-705-1963　　FAX：075-705-1976
E-mail：ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

Facilitator Mind
京都産業大学
コーオプ教育研究開発センター　Ｆ工房